

マスからソフトへ、ツーリズムの新動向

——自然・文化環境の過度利用の反省——

(2)何故マス・ツーリズムか、スペインの場合

内 田 忠 男

はじめに

- I マス・ツーリズムとスペインの観光業
 - II 地中海とスペインの環境問題
 - III 1980年代末の観光客減少のショック
 - IV スペインの新たな選択
 - V リゾートの新装と農村ツーリズムの振興
 - VI 農村は観光業を担い得るのか
- おわりに

現代の旅行者は、熱心に海岸に足を運ぶ。海洋リクレーションに対する情熱は飽くことを知らない。観光は必要な収入をもたらしてくれるが、観光客の量そのものが、彼らが見ようと思って来たそのもの自体を破壊しつつある。

観光は'90年代も引き続き沿岸地帯のひとの主要な収入源の一つとなるだろう。観光客の増加は、沿岸リゾート地の人口増加をひきおこす。例えば、地中海沿岸の人口は夏の間、概算によると少なくとも2倍に膨れ上がる。

ジョナサン・ポリット『地球を救え』から 芹沢高志監訳

はじめに

マス・ツーリズム、バック・ツアーに象徴される大量の観光客が、3Sを目指して地球上を駆けまわり、リゾート地をうめた時代は過ぎさろうとしている。海浜のリゾートは危険な環境になってきたからだ。

3Sとは、Sun, Sand and Sea,あるいはSun,

Sea and Sexの頭文字で、人々が海浜リゾートに求めるものを指している。この3Sが、今、否、今後ますます、人々を夏季海浜リゾートからひきはなし、遠ざけるものとなるだろう。もう既にその徴候はさまざまに現われてきている。

まずSun,太陽について。太陽は今人々にとって、いや動植物にとっても、生命を短めるかも知れない凶器に変わりつつある。しかも

我々人間の行為によって、と言えば、すぐに理解してもらえらるだろう。オゾン層の破壊が、予測を上まわるスピードで進み、両極上において範囲を拡げるだけでなく、中緯度地帯にもオゾン層の薄い部分が出現して、紫外線が、UV-Bの脅威が増してきたからである。フロンその他オゾン破壊する化学物質の使用は、しだいに厳しく受け止められて製造中止の時は繰りあげられたが、フロン系の超安定した気体は、ながい時間をかけて成層圏にまでのぼりつめるので、今からも尚上空のオゾン層の破壊は激しさを増してゆくと言われている。オゾン層の破壊によって、紫外線が吸収されず直接地表に到達する割合が大となることによって、影響を受けることが多いのは、色素細胞の少ない白色人類と言われている。そして彼らこそ、夏季海浜リゾートで長期にわたって、こんがり焼いてきた人種などである。北極圏から亜寒帯の冬季陽の恵みの薄い地帯から大量に地中海海岸に、そして今では赤道直下の太平洋、カリブ海の島々にバカンスをすごしてきた恵まれた北の中緯度ヨーロッパの人々にとって、オゾン層のうすくなった地域が、更に自分たちの頭上にまで拡がってきて、日常生活でも危機感を抱かざるをえなくなったのだ。(勿論日本人も脅威から逃げられるわけではなく、日光と関係のある皮膚がんは、15年間で約2倍に増えていて、高齢者だけでなく若い人々にも拡がっている。若い人々の場合はスキー、ゴルフなど屋外レジャー、スポーツがさかんな故だと、埼玉医科大学の池田重雄教授は指摘している。教授は、日光と発がんについての、医学的推定はまだ限界はあるとしながらも、オゾン層破壊と有毒紫外線の増加、それが現時点でどの程度皮膚がんに直結しているのか……それは人類の将来を考えるとという点からも、これからの重要な研究課題であろうとされている。¹⁾)

第二は海浜、ビーチと海である。

海は、人間活動がつくりだすさまざまな廃棄物の「底なしの流し台」である。したがって、人間活動、つまり経済行為、生産と消費及び運搬の諸行為が最も活潑に行われている地域が、

もっとも多く廃棄物をつくりだす。

だから豊かな地域こそ汚れをつくりだし、海へと流しこむ。先進国がそれである。先進国に囲繞された海は、したがって最も汚染の進んだ海と予想されるが、事実北海は1988年のアザラシの大量死で明らかなように、汚染の度合いはひどい。しかし北海は大西洋に2方向で開かれていて、汚染は拡散しやすい。海水の出入りのすくない閉鎖海系は、汚染が集積してひどさを増す。地中海の場合がそうだ。OECDの環境白書によれば、本稿の対象地である地中海は、「世界中で最も開発が進んでいる地域海であり、その海岸は、世界で最も汚染されている。(中略)地中海は海水の入れかわり速度が遅く、完全に入れかわるためには70年かかる。このような性質といくつかの国で沿岸人口が多いことが相まって、地中海を汚染に対して極度に脆弱な海にしている」と、特徴づけられている。

地中海は生産と消費の廃棄物と、第二は観光活動による廃棄、排出物の両者によってダメージを受けているのである。

① 「地中海は、下水排水、栄養分、石油、金属、合成有機化合物等による汚染を沿岸の環境変化によって脅威にさらされている。陸上汚染源が特に重要であり、地中海の汚染負荷の85%を占める。²⁾」

② 「沿岸人口の多さと毎年夏になると集まってくる1億人の観光客は、ただでさえ多量な下水排水をさらに多くする。観光やその他の社会経済活動は、沿岸開発に拍車をかけ、海岸線に大規模な物理的改変を引き起こしている。²⁾」

ドイツの週刊誌『Die Zeit』が地中海の状態を伝える紙面に掲げたイラストを、16頁に縮小してのせたが、まさに、こうした感じそのものである。こうした海、排水、糞だめと呼ばれてしまっている海、海岸に、環境に意識しはじめた人々が、いつまでヴァカンスをすごそうとするだろうか。夏季ヴァカンス日程を短縮し、かわりに二度目のヴァカンスを、冬季観光(スキー等)＋農村・文化観光で過ごすように、ヨーロッパの人々のトレンドが変わってきたと指摘す

る研究者もあるが、経済的余裕が出てきたからとも考えられる³⁾けれども、それより海浜リゾートが人々を引き止める力を喪失してきたからだとも言えるのではないだろうか。

さて、第三のS, Sexである。70'sは、まだFFK（全身で太陽をあびる人々のヌーディスト・ビーチ）は特定の、しかもほんの少数のリゾートで許されるだけであったが、80'sには、ブラレスはもうヨーロッパの女性の海浜スタイルと言えるほどにまで拡がり、自由で解放されたヴァカンスは、海浜でと、人々をさそうこととなった。しかし、エイズの拡大は、冷水の働きをするだろう。「太陽がいっぱい」のヴァカンスから、今では、遠い距離を飛行機で飛ぶ、第三世界の海浜リゾートが Boom となりつつあるが、これも、急速に退潮することが予想される。

加えて、観光客の最大の送り出し地域である、ヨーロッパでは、深刻な10%を超える失業率、2,000万人に達しようかというほどの失業人口をうみだしている経済不況のなかにあつて、回復の見通しはおろか、そのシナリオさえ描けない状態にある。時間短縮、休暇日数の拡大がますます進むばかりだった潮流も変わるような気運である。

ヴァカンス、特に夏季長期休暇をめぐる動きは、環境、経済、労働諸条件の変化によって今大きく変わろうとしている。こうしたなかで、夏季休暇の、主役だったマス・トゥーリズム、旅行業者が取りしきってきたパック・ツアーも、当然に大きな変化の渦のなかで、観光商品のあり方を変えざるをえないし、又事実変えようと、さまざまな経営努力を、たとえば「Green Tourism」, 「Alternative Tourism」, 「Soft Tourism」, 「Social Tourism」, 「Rural Tourism」, 「Farm Tourism」, 「Cultural Tourism」, 「City Tourism」, 「White Tourism」, etc. と多種多様な観光のあり方を商品化することで、進めている。

そのいずれもが「3 S Tourism」= 「Mass Tourism」に替わる観光、ヴァカンスのあり方を模索するものであった。しかし、この代替型

観光がうまく mass tourism にかわって人々を、しかも大量の、たとえば地中海におしよせる1億人の観光客を、そのかなりの部分でも、ひきよせることができるだろうか。

転回は可能か、そんな疑問をもって、本稿は Mass tourism のヨーロッパでの舞台そのものであったスペインを取りあげて、その可否を考えてみたい。

- 1) 『今「地球」を救う本、地球環境大事典』 学研 1991年2月 57頁。
- 2) 『OECD 環境白書』 1991年 89頁。
- 3) Rob Davidson, *Tourism in Europe*. Pittman London 1992 175P. p. 142.

(I)

マス・トゥーリズムとスペインの観光業

A. スペイン経済と観光業

何故スペインを取り上げるのか。それはスペインが、マス・トゥーリズムの功罪を、経済面でも環境面でも、最も明白に示しているからである。

まず、スペイン経済と観光業ではスペインの歴史と観光産業のあらましをみることから始めよう。

周知のように、1936年の総選挙に勝利して、人民戦線内閣が成立し、イタリア・ドイツのファシスト国家の重い暗雲を、スペインが払うかと思うまに、モロッコでフランコ軍人が軍事蜂起をくわだて、ジブラルタル海峡をこえて進軍、ここにスペイン内戦が始まることとなった。内戦は2年と10ヶ月続き、1939年4月フランコ政権は内戦終結を宣言し、勝利を誇った。スペインは、折から始まった第二次大戦には、独伊の期待にもかかわらず中立を宣言して、国際的孤立の道を選択した。日独伊のファシスト国家の敗北で終わった第二次大戦後、スペインの孤立は、1946年の国連総会でのスペイン排斥決議採択で一層深まった。しかし東西冷戦が進行するなかで、西側諸国のスペイン評価は変り、1950年11月国連のスペイン非難決議は解除され、しだいに国際社会への復帰が始まっていった。1952年ユネスコ加盟、1955年国際通貨基金(IMF)、国

際復興開発銀行 (IBRD), 国際労働機関 (ILO) に加入し, そして同年12月国連加盟を果すこととなる。'56年12月に日本は加盟承認を受けたのだから, ほぼ1年以前にスペインは国際的是認をとりつけたのである。

1955年は日本では経済企画庁が発足, 翌年7月に『経済白書, 日本経済の成長と近代化』を発表するが, 日本の高度成長が始まるのは, この時期であったが, スペインでもフランコ政権のアウタルキー政策に修正が加えられはじめたのは, '50年代のおわりであったから, スペインは経済の面では4, 5年ほど遅れをとったこととなる。

1959年7月, スペイン政府は経済安定計画を発表, 閉鎖統制経済から解放, 自由経済への転換を始めることとなった。その骨子は, 5点にまとめあげられる。

- ① 信用および財政支出の引締めと貨銀の凍結
- ② 国債発行の中止
- ③ 現実的なペセタ為替相場の決定
- ④ 新関税税率による国内産業の保護と段階的な輸入の自由化
- ⑤ 外国投資に関する法規の改正 (外資導入の促進)¹⁾

スペインは, OECD (経済協力開発機構) と IMF (国際通貨基金) と緊密な連絡をとりなが

ら, 「輸入代替に基礎をおいた工業化政策に伴う制約と国内市場の狭隘性や明らかな脆弱性による制約を克服²⁾」するために, 開放経済に乗り出した。これからのスペイン経済の発展には目ざましいものがあった。スペインの'60~'70年代にふれた著作は, ほぼひとしなみに, 「日本を除けば, 全先進国のなかでトップ」としている。1950年から'80年の統計表をみると, 労働力人口の配分では, 日本と工業面ではほぼ同じ変化をたどったことが解る。

しかし, 他の2部門, 農業とサービス業では, '80年では尚農業人口を多く抱えている。それに1人当りの産出高ではスペインは, 日本の約半分, イタリアより1000ドル引きはなされた, 最下位でしかない。とはいえ, 「1960年代と'70年代始めにかけての経済発展はスペインを一気に先進工業諸国に迫る準先進国の地位に押し上げた³⁾」のであった。

'60年から'72年の13年間に工業部門は年率8%の増加率を記録した。なかで目ざましい成長を遂げたのは自動車産業で15倍の伸び, 造船では6倍, 石油精製でも同じ伸びを示している。

日本の高度成長は, '55年ごろからの大企業による設備投資と輸出ブームにつづいて, '60年「国民所得倍增計画」の下, 池田内閣が積極的な財政投融资をすすめ, 工業基盤整備, いわゆるインフラストラクチャーの整備を大々的に行

表1 国際経済のなかのスペイン経済

	労働力人口の配分						1人当り産出高 〔ドル〕 (1979)	1人当り産出高 成長率 (1960-74)			
	農 業			工 業					サ ー ビ ス 業		
	1950	1960	1979	1950	1960	1979			1950	1960	1979
合衆国	12	7	2	—	36	32	—	57	66	10,633	2.9
イギリス	5	4	2	50	48	47	44	48	56	6,320	2.3
ベルギー	11	8	3	47	48	41	42	44	56	10,920	4.5
フランス	29	22	9	—	39	39	—	39	52	9,950	4.4
オランダ	14	11	6	41	42	45	45	47	49	10,230	4.0
ドイツ	23	14	4	44	48	47	33	38	49	11,730	3.7
イタリア ¹⁾	44	31	11	29	40	45	27	29	44	5,250	4.2
日本	—	33	13	—	30	38	—	37	49	8,810	8.8
スペイン	50	42	19	25	32	39	25	26	42	4,380	5.8

1) 1951年

出典: Banco Mundial (世界銀行) (1981), Malinvaud, E. (1979), Ministerio de Economia (1979) および Garcia Delgado, J. L., y Segura, J. (1977)

『現代スペイン経済』2頁より。

ない、これに民間投資も加わるといった事態ですすんだ。太平洋ベルト地帯をはじめとする地域開発を決定した'62年の全国総合開発計画（全総）は国、地方の大々的な財政投融资（それにさまざまな補助金がつけられたが）によって可能となった。手厚い保護によって育ってきた国内産業は設備更新、拡張により競争力を強めてきたので、課題は貿易の拡大、輸出増加となった。

そこで日本は1963年にはガット11条国、'64年4月にはIMF 8条国（国際収支の悪化を理由に為替制限の出来ない国）に移行し、OECD 経済協力開発機構に加盟した。いわゆる貿易の自由化である。こうして日本は先進資本主義国の一員として認知された。スペインに後れること7年であった。日本は高度成長によって国内の産業構造と産業基盤（インフラ）が国際的に競争可能、したがって自立可能なものとなるのをまわって、貿易の自由化、次いで資本の自由化とすすんだのであった。つまり、資本不足から幾多の Stop and Go を経験しなければならなかったとは言え、とにかくも自前の資金で先進工業経済を形成しえたのであった。

スペインはどうだったのか。前にみたように、スペインはまず自由化を先行して経済成長路線、工業化路線に乗りだしていったのであった。

この点で日本とは正に対照的である。

16倍にも増加した自動車産業をみてみよう。イギリスのロールス・ロイス、ドイツのベンツ、フランスのルノーといったよく知られた自動車会社の名前に、スペインの会社の名はない。なぜなら「スペインの乗用車メーカーはすべて外資系である⁴⁾」からだ。スペインの工業化は、積極的な外資導入によって可能となったと言われる。この事態は、'80年代以降今日までも変わってはいない。外国投資法（1986）によれば、「国防関連産業、テレビ・ラジオ放送、賭博、航空輸送の特別認可が必要な部門を除き、それ以外の分野、業種への外国投資は基本的に自由である。⁵⁾」（したがって、後にみるように、観光産業でも、ホテル、アパート、別荘建設でも外国からの参加は自由である。）

スペインは、こうして外資導入によって経済政策路線を進めることとしたのであったが、これが長期にわたって可能となったのは、経済が安定していて外国資本にとって有利な投資先でありつづけたからであった。財政破綻におちいることなく深刻な経済危機にみまわれることもなく、スペイン経済が成長を続けた、その秘密はどこにあったのか。

スペイン経済の高度成長を可能としたもの、スペインの奇跡の謎こそ観光産業であった。

表2 スペインへの外国直接投資

地域・国	1985年	1986年	1987年	1988年	1989年	1990年
	%	%	%	%	%	%
E C	40.4	50.7	49.1	55.1	52.0	68.7
フランス	10.3	6.2	6.9	7.7	12.9	24.4
オランダ	0.7	7.6	16.8	22.1	15.3	21.1
ドイツ	10.3	26.1	3.7	7.5	6.7	6.7
イギリス	6.5	7.0	6.2	13.1	11.5	8.3
アメリカ	22.3	8.0	5.5	4.0	4.1	2.5
日本	5.1	2.5	4.6	1.6	1.9	2.0
O C E D	78.3	71.7	70.6	68.5	68.5	79.1
その他	21.7	28.3	29.4	31.5	31.5	20.9
(%)	100	100	100	100	100	100
計	280,085	400,903	727,279	843,254	1,244,998	1,829,640
(100万ベセタ)						

(注) 「その他」の大部分は非居住スペイン人によるもの。
出所：経済大蔵省
『スペイン・ハンドブック』から

表3 国際収支

(単位：百万米ドル)

	1971	1972	1973	1974	1975	1976	1977	1978
経常収支	856	581	585	-3,233	-3,488	-4,287	-1,205	1,807
輸出	2,979	3,920	5,304	7,211	7,807	8,996	10,485	13,527
輸入	-4,578	-6,236	-8,807	-14,258	-15,195	-16,301	-16,508	-17,542
サービス受取	2,979	3,920	5,160	5,651	6,078	5,559	7,014	9,565
サービス支払	-1,284	-1,714	-2,480	-2,979	-3,321	-3,685	-3,373	-5,195
民間移転	772	878	1,416	1,151	1,162	1,160	1,185	1,452
政府移転	-5	-10	-7	-8	-19	-16	-9	-
長期資本収支	499	795	799	2,712	1,803	2,008	3,188	1,830
直接投資	177	231	337	273	219	167	161	482
政府資本	-102	-48	-14	43	13	561	1,169	-
その他	425	611	476	2,396	1,571	1,280	1,859	1,348
短期投資収支	194	101	98	-77	837	716	1,299	-
銀行預金	174	75	55	34	743	770	938	-
その他	20	26	43	-111	93	-54	362	139
誤差脱漏	-24	-28	-136	-109	30	472	-1,763	59
総合収支	1,525	1,448	1,346	-707	-818	-1,090	1,520	3,696
S D R 割当	42	46	-	-	-	-	-	-
金売却	-	-	-	-	-	-	-	-
外貨準備高(年末)	3,268	5,014	6,772	6,485	6,090	5,284	6,590	10,725

(IMF, International Financial Statistics)
 『スペイン・ハンド・ブック』から

スペインが貿易と資本の自由化を選択した結果、直面することとなるのは、まず第一にヨーロッパ先進諸国それにアメリカ合衆国からの消費財、生産財の流入である。国民のより優れた製品への需要、それに遅れていた生産技術を近代的生産方式に取り替え、しかもそれをプラントでもって行なう投資は、スペインの輸入を増加させる、が他方輸出と言えは伝統的な農産品、それに初期には鉱産物しかなく、オリーブ油、柑橘類、ワイン等の世界でも十位内を占める輸出品はあるものの、小麦等の穀物は自給できず、農産物全体では輸出が辛うじて上まわるかどうか、否、輸入が超過さえする状況が続いた。貿易収支は、だから恒常的な赤字であった。この赤字を償ったのが、貿易外収支である。なかでも、観光業による収入、それにイギリス、フランス、ドイツへと出稼ぎに出た大量の労働者の郷里への送金が重要であった。「この2項目で貿易収支の赤字を埋めるに十分な額となった。⁶⁾」のである。そしてこの均衡のとれた状態をみて、外国からの投資は継続し、また長期借入れも進み、工業化のための資本形成の一翼が確保されたのである。⁷⁾ (表2, 3をみられた

表4 スペインの国際収支の推移

(年平均値：単位100万ドル)

	1959-69	1970-73	1974-80
輸入	2,198.33	6,029.70	19,510.22
輸出	1,093.35	3,696.12	12,490.55
貿易収支	-1,104.98	-2,333.57	-7,019.67
観光・旅行	744.46	2,132.35	4,048.65
移民からの送金*	224.72	631.69	1,179.44
経常収支	-150.70	515.50	-2,206.74
長期資本収支	300.42	716.15	2,520.25
基礎収支	149.71	1,231.7	313.51
資金の移動	-122.95	-1,282.15	-763.91

* この項目は、移民からの経常的なトランスファーに限定されている。

出典：Ministerio de Economía y Comercio. Balanzade Pagos de Espana. [各年]
 『現代スペイン経済』から、p. 146 f.

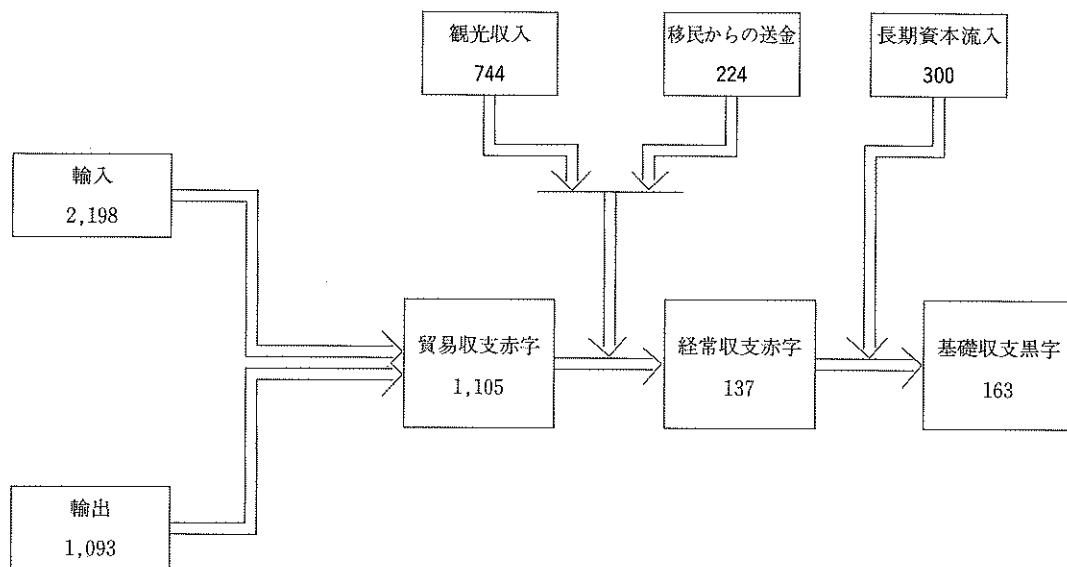
い。)

スペインの国際収支は総合的には極めて順調に推移してきたと評価されてよいであろう。

表3にみるように、外貨準備高は70年代に入って着実に増加しつづけている。サービス受取(観光収入)と国外からの労働者の税金等の民間移転の貢献は明らかである。

2度の Oil Shock があった1974~80年期は、スペインの石油輸入額の増大とヨーロッパ

図1 スペインの国際収支を均衡させる主な項目
 (各数字は100万ドル単位で示された、1959～69年の年平均値)



出典：Balanza de Pagos. Ministerio de Comercio. のデータにもとづき独自の計算。
 『現代スペイン経済』から、p. 176 f.

の経済不況のために、両貿易外収支でカバーしきれなかったが、15年間を合わせると、経常収支はプラスであり、外国からの投資、借入金長期資本収支を加えると、開放経済化をはじめた'59年から'80年まで、基礎収支は全期間では、常にプラスであった。スペイン通貨ペセタが高く評価されるようになるのも当然であった。

表4、図1は、スペインの国際収支均衡がどのような要因で実現されているかを表と図で示したものであるが、観光収入の意義が容易に理解されよう。⁹⁾スペインの輸出金額10億9300万ドルに観光収入は7億4400万ドル、移民（出稼ぎ労働者）からの本国送金は2億2400万ドル、計20億6100万ドルの経常収入の約3割6分を、観光収支が稼ぎだしているのである（出稼ぎ送金は11%）。観光収入は、スペイン経済が近代化へ向けて進むのに不可欠で、スペインの浮沈がかかっている重要な財源であった。

'80年代に入っても観光収入の果す役割は変わらず、国内総生産（GDP）に占める割合は4.2%～4.5%、財・サービスの輸出項目のなかでの割合はほぼ21%であった。ヨーロッパのなかで、

観光収入に依存しなくてはならない国は、まずオーストリアであるが、GDPでは7.7～7.9%。後者では18.8%～16.8%であった。工業規模の大きさのためにスペインの場合観光収入は若干比較して割合は低くなるが、収入のうちで占める割合はより大となる。次頁の表5、6にみるように、'80年代に入って、準先進国に達したと言われはするものの、スペインに近いのはギリシアであった。

この重要な観光業、スペインの観光産業は、ではどんな特徴と姿をもったものであったのだろうか、次にそれをみてみよう。

B. スペインの観光業

スペインの観光産業の特徴の第一はマス・トゥーリズムそのものだという点である。他の諸特徴を、すべてここから分岐する。

険しいピレネー山脈によってフランスからの接近は難しく、大西洋あるいは地中海を渡って上陸する機会も、漁民、船員はともかく、少なく、'36年内戦勃発前夜、外国からの観光客は年間20万人を超えることはなかった。⁹⁾事態が

表5 粗国内生産による旅行収入項目の割合
Ratio of the "Travel" account receipts to the gross domestic product (%)

	1983	1984	1985
Austria	7.9	7.9	7.7
Belgium-Luxembourg	2.1	2.2	2.1
Denmark	2.3	2.4	2.3
Finland	1.0	1.0	0.9
France	1.4	1.6	1.6
Germany	0.8	0.9	0.9
Greece	3.4	3.9	4.3
Iceland	1.1	1.4	1.6
Ireland	2.7	2.7	3.0
Italy	2.2	2.1	2.0
Netherlands	1.1	1.2	1.2
Norway	1.2	1.2	1.3
Potrugal	4.1	5.0	5.5
Spain	4.4	5.0	4.9
Sweden	1.2	1.2	1.2
Switzerland	4.2	4.5	4.4
Turkey	0.8	1.1	2.1
United Kingdom	1.3	1.4	1.6
EUROPE	1.8	1.9	2.0
Canada	1.0	1.0	1.1
United States	0.3	0.3	0.3
NORTH AMERICA	0.4	0.4	0.4
Australia	0.7	0.6	0.7
New Zealand	1.0	1.4	1.3
Japan	0.1	0.1	0.1
AUSTRALASIA-JAPAN	0.2	0.2	0.2
OECD	0.9	0.9	0.9

Source: OECD, Balance of Payments Division and *National of OECD Member Countries*.

大きく変るのは、フランコ政権が、前にみたように国際的孤立とアウトルキー政策から国際社会と開放経済へと転換をはじめた'60年代はじめからであった。

フランコ政権が、経済計画にしたがって自由化を進め、観光客の受け入れに積極的になった(動機にはフランコ政権の国際的承認をとりつけようとする企図もあったという)のだが、スペインの意欲だけでは、観光客は集まりはしない。表7にみるように'60年から'70年まで、5年ごとに倍増する外国人観光客を迎えることが出来たのは、外的条件がととのったためであった。ヨーロッパ、とりわけイギリス、フランス、ドイツの経済復興も順調に行き、'60年代はじめには、労働者の夏季有給休暇の制度も確立し、可処分所得も増し、加えて安価なオイルを利用し

表6 財とサービスの輸出に占める旅行受取項目9割合

Share of "Travel" account receipts in exports of goods and services

	1983	1984	1985
Austria	18.8	17.7	16.8
Belgium-Luxembourg	2.2	2.1	2.0
Denmark	5.8	5.8	5.5
Finland	3.2	3.0	3.0
France	5.0	5.2	5.2
Germany	2.6	2.6	2.7
Greece	16.4	17.9	20.1
Iceland	2.4	3.2	3.5
Ireland	4.7	4.3	4.5
Italy	9.3	8.6	8.1
Netherlands	1.8	1.8	1.7
Norway	2.5	2.4	2.5
Potrugal	13.3	13.5	14.2
Spain	21.0	21.1	21.1
Sweden	3.0	3.0	3.0
Switzerland	9.1	8.9	8.6
Turkey	5.3	5.6	9.6
United Kingdom	3.3	3.2	3.5
EUROPE	5.2	5.2	5.2
Canada	3.5	3.3	3.5
United States	3.4	3.2	3.3
NORTH AMERICA	3.5	3.2	3.3
Australia	4.3	3.8	4.0
New Zealand	3.4	4.3	3.8
Japan	0.5	0.5	0.5
AUSTRALASIA-JAPAN	1.0	1.0	1.0
OECD	4.2	4.1	4.1

Source: OECD, Balance of Payments Division.

[Tourism Policy and international tourism in OECD Member Countries] OECD, Paris 1987, p. 78.

表7 スペインの外国人訪問客数
Foreign visitors to Spain, 1955-86

	訪問客数 Number of visitors	指数 Index
1955	2,552,402	100
1960	6,113,255	242
1965	14,251,428	565
1970	24,105,312	956
1975	30,122,478	1,194
1980	38,022,816	1,507
1984	42,931,658	1,702
1985	43,235,362	1,714
1986	47,388,793	1,879

Source: Anuario de Estadísticas de Turismo

M. Valenzuela, *Spain*, p. 44から。

た新しい交通手段、飛行機で遠距離の目的地も「近く」なったのである。

労働者が獲得した、この夏季有給長期（短くても3週間）休暇を過ごす場所として選択されたのがスペインだったのである。

選択された、とは言っても、新しくはじめて夏季休暇を得た労働者が、接触し、利用する機会がほとんどないスペイン語の話される、知ることのなかった風土、文化、自然環境のスペインを、自分でえらぶ筈はない。スペインをヨーロッパの労働者のヴァカンスの対象地としてえらんだのは、ツアー・オペレーター、つまり旅行代理店、観光産業の業者であり、選択の理由は、アウタルキー経済が続いたための（ヨーロッパ諸国と比較しての）低物価、ファシスト政権によって労働者がおさえられていて、争議が少ないこと、それに外貨収入を渴望するフランコ政権の積極的な受け入れ政策（外資導入の自由は、ホテル等宿泊施設の建築を可能としていたし、フランコ政権は対外情宣の費用をおしまなかった）のためであった。

英独仏らの旅行代理店、ツアー・オペレーター

は、パッケージにセットした観光商品を労働者に大々的に、しかも安値で売りだした。勿論安値だけで買われたのではなく、スペイン自体が持つ魅力がモノをいっていた。（オゾン層破壊で「太陽がこわくなった」今日できえもスペインは観光スローガンとして掲げているのは理解に苦しむが）「太陽、砂浜、海。Sun, Sand and Sea」の3Sの魅力であった。ツアー・オペレーターによって集められ、飛行機あるいは大型バスで運びこまれる、パッケージ、ツアーのマス・トゥーリストたちは、彼らが開発したりゾート宿泊施設に収容され、ヴァカンスを享受する。以上述べてきたことから引きだされる、スペインの観光産業の、他の特徴は、以下の項目にまとめることが出来よう。（Mass Tourism, Package tour, Cheap tour by labours は、もう前提とする。）

- ① 季節的集中（もっぱら夏季）
- ② 地域的集中（地中海沿岸）
- ③ 長期滞在
- ④ スペインの歴史・文化・伝統に無関心。
- ⑤ 宿泊施設、娯楽、文化レジャー施設に対

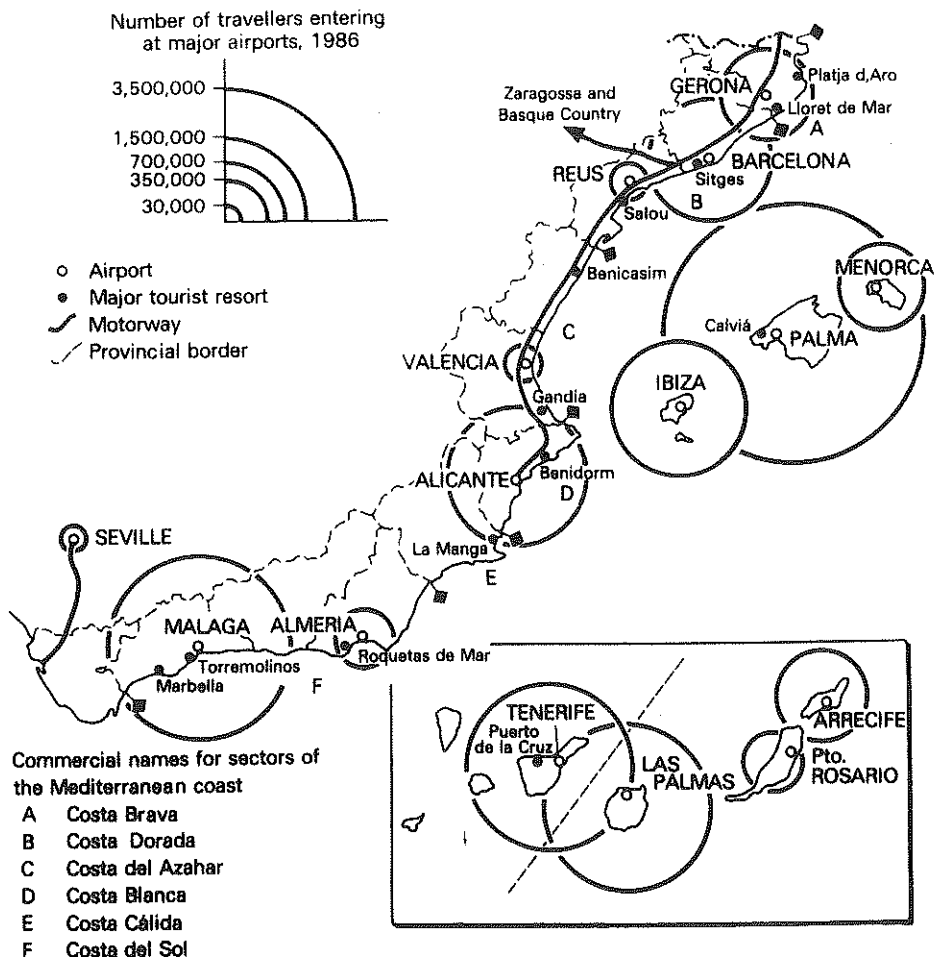
表8 スペインのホテル客の地域別分布
Regional distribution of travellers using hotels in Spain, 1985

	Total	Foreign tourists		Domestic tourists	
		Total	(%)	Total	(%)
Andalusia	5,214,418	2,814,565	15.5	2,399,853	15.2
Aragon	903,191	779,899	0.8	123,292	4.2
Asturias	368,143	342,302	0.2	25,841	1.8
Balearics	3,342,989	509,293	18.3	2,833,696	2.7
Canaries	2,066,225	601,473	9.4	1,464,752	3.2
Cantabria	344,523	306,939	0.3	37,584	1.6
Castille-LaMancha	1,018,267	763,859	1.6	254,408	4.1
Castille-Leon	1,956,610	1,612,510	2.2	344,100	8.7
Catalonia	4,695,398	2,134,797	16.5	2,560,601	11.5
Extremadura	540,071	472,688	0.4	67,383	2.5
Galicia	1,251,722	1,093,590	1.0	158,132	5.9
Madrid	3,331,148	1,970,338	8.8	1,360,810	10.6
Murcia	450,982	366,489	0.5	84,493	2.0
Navarra	275,880	241,752	0.2	34,128	1.3
Basquecountry	795,155	599,921	1.3	195,234	3.2
LaRioja	158,945	145,229	0.1	13,716	0.8
C.Valenciana	2,476,709	1,463,663	6.5	1,013,045	7.9
Total	34,051,006	18,543,710	100.0	15,507,296	100.0

Source: INE, *Movimiento de viajeros en establecimientos turisticos*, 1985
M. Valenzuela, *Spain*, p. 44から

図2 スペインの主要な観光地域図

Major features of Spain's leading tourism regions



M. Valenzuela, Spain, p. 43から

する要求度は高くない。¹⁰⁾

こうした特徴は、スペインにとっては、どんな条件あるいは問題群をつくりだすことになるのかを考えてみよう。

まず①から。夏季集中は顕著で7月～9月に45%、1月から3月にかけては14%、4月～6月は22%、10月から12月は19%（1989年）である。

ホテルをはじめとする宿泊施設、付帯しなくてはならないインフラストラクチャーの有効稼働率は低く、経済効率も低く、過剰投資であるのは明白である。観光産業で働く労働者も通年勤務は困難で、季節的の失業者が必然的に生み

だされて、雇用関係が問題となる。

②では、海浜リゾートが観光客を集めることとなり、地域間格差がますますひどくなる結果をつくりだす。表8、図2が示すように、外国人観光客は、地中海に浮ぶバレアレス諸島、地中海に面するカタロニア・アンダルシア、そして大西洋のカナリア諸島に集中し（約60%、1985年）、内陸部のエストレマドゥーラ、カスティリャ＝ラ・マンチャ、カスティリャ＝レオン、アラゴン、レオハなどは外国人観光客からみれば全く存在しないに等しい。もっとも、この事情は、スペイン人観光客、自国の観光客にとっても同様で、観光産業は内陸部の自然風土条件

の厳しい貧困な地域を相対的にますます貧困にさせる結果をもたらしているのであった。観光業は、スペインの場合、地域格差の解消をうみだしはしていないと言えよう。

③ 長期滞在とは言っても、'60年から'90年代まで、次第に、1個所に長期、一年に一回滞在するパターンはくずれてきて、滞在日数は減り、早く切りあげた分だけ、もう1度休暇を、冬季にあるいは遠距離の土地ですごすことがふえてきた。ヴァカンスの経験をつみ、旅なれもし、又関心も増してきた観光客は、毎年同じパター

ンを繰り返すのではなく、異なる体験、機会を求めてきたのである。いわゆる white tourism, cultural tourism, green tourism, rural tourism など、選択の中はひろがってきた。これはスペインにとっては、不利な推移と言わねばならない。ヨーロッパの勤労者は、スペインを捨てはしないまでも、滞在日数、それに休暇の費用をスペインでは減らしはじめたことになるからだ。

④ ①の註に書いたように、ヨーロッパの観光客は、海浜第一で、マドリッドはおろか、内

表9 地域別ホテル雇用者数
Regional distribution of hotel employment in Spain, 1985

	Permanent employment	High season employment	(%)
Andalusia	8,965	16,004	12.3
Aragon	1,846	3,296	2.5
Asturia	637	1,137	0.9
Balearics	19,059	34,021	26.2
Canaries	5,812	10,373	8.0
Cantabria	890	1,589	1.2
Castille-LaMancha	1,157	2,064	1.6
Castille-Leon	2,705	4,829	3.7
Castalonia	15,018	26,808	20.7
Extremadura	634	1,132	0.9
Galicia	2,458	4,389	3.4
Madrid	4,288	7,653	5.9
Murcia	850	1,517	1.2
Navarra	458	818	0.6
Basquecountry	1,382	2,467	1.9
Rioja	220	393	0.3
Valencia	6,340	11,319	8.7
Total	72,719	129,809	100.0

Source: Secretaria General de Turismo, El empleo en sector hotelero, 1985

Employment linkages of tourism in specialised tourist areas in Spain, 1985

	Tertiary sector Employment (%)		Building industry Employment (%)		Hotels and restaurants Employment (%)	
Alicante	173,697	44.6	36,667	9.4	24,217	6.2
Balearics	175,039	65.3	25,830	9.6	58,052	21.7
Gerona	92,089	48.9	18,521	9.8	16,916	9.0
Malaga	159,166	60.4	30,583	11.6	27,754	10.5
SantaCruzdeTenerife	130,241	61.8	20,226	9.6	22,713	10.8
Spain	6,015,396	50.6	958,430	8.1	584,291	4.9

Source: Bilbao, Renta Nacional de Espana, 1985
M. Valenzuela, op. cit. p. 54 f.

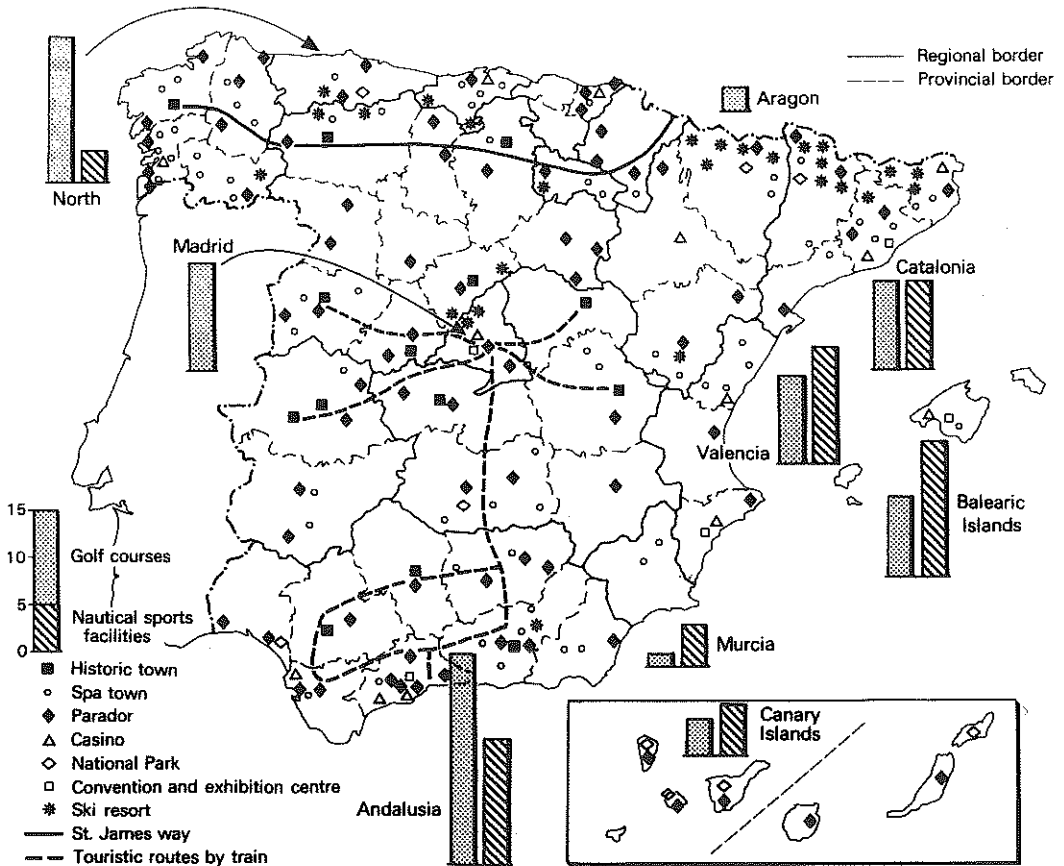
陸の文化的伝統的施設、遺跡を訪れる意欲にとぼしく、文化遺産に富んだ内陸部は、土着の人々に（観光客をターゲットにした）営業、雇用の機会をつくりだすことはない。

⑤ ヴァカンスの機会にはじめて、外国を、またホテルを体験した労働者の、施設、サービスへの要求は高い筈はなく、自国での居住条件が判断基準であった。そこで'60年代から、急増するヴァカンス客を収容するために、文字通り雨後の筍のように海浜に林立、乱立することとなったホテル群は、壁もうすい、安普請であった。したがって自国での居住条件が改善され（つまり家屋の質を高める経済的余力がついてくると）要求度が高くなると、早晚陳腐化し、飽き

られて、後に立てられて施設、環境とも高度な宿泊施設をもったりリゾートが探し求められることとなる。

加うるに、環境の質の問題がある。急増する、軽い財布しか持たない観光客を相手に、外国のツアー・オペレーターが設けていった宿泊諸施設とそのインフラストラクチュアは、環境に意を注ぐことが少なかった。未開発で自然そのままが残っていて汚れない土地であればあるだけ、人間の及ぼす環境負荷を意識することは少ない。環境負荷を軽減する投資は節約される。そこで観光客のつくりだす下水、雑廃水、ごみは未処理で（利用の集中する夏季では特に）海浜や海中へ放出されることとなるが、'60年代は

表10 スペインのレジャー諸施設
Major tourism resources in Spain



M. Valenzuela, op. cit. p. 55

表11 国際観光収入 (ドル表示)
International tourist receipts (R) and expenditure (E) in dollars (Continued)

All countries			
1989	1990	%90/89	
10716.2	11756.8	9.7	Austria
6265.8	6212.0	-0.9	
3082.6	3698.5	20.0	Belgium-Luxembourg
4338.1	5445.1	25.5	
2311.1	3321.5	43.7	Denmark
2928.4	3673.8	25.5	
1016.5	1161.8	14.3	Finland
2040.1	2754.7	35.0	
16245.1	20184.8	24.3	France
10030.7	12423.3	23.9	
8752.3	10683.1	22.1	Germany
23673.9	29836.2	26.0	
2003.3	2577.3	28.7	Greece
822.4	1092.7	32.9	
107.6	122.0	13.4	Iceland
176.0	217.4	23.5	
1070.0	1447.2	35.2	Ireland
989.2	1159.4	17.2	
11987.4	19741.7	64.7	Italy
6773.4	13826.2	10.4	
3019.9	3611.6	19.6	Netherlands
6450.0	7330.9	13.7	
1335.3	1516.7	13.6	Norway
2850.5	3414.2	19.8	
2703.8	3530.8	30.6	Portugal
587.6	863.2	46.9	
12652.0	18426.1	13.4	Spain
3080.3	4211.2	36.7	
2544.1	2896.1	13.8	Sweden
4969.1	6067.3	22.1	
5597.8	6869.2	22.7	Switzerland
4952.7	6015.9	21.5	
2603.3	3348.8	28.6	Turkey
569.1	522.2	-8.2	
11359.6	13910.0	22.5	United Kingdom
15299.9	17613.6	15.1	
5013.3	5259.6	4.9	Canada
7369.6	8434.3	14.4	
34432.0	39253.0	14.0	United States
34229.0	38376.0	12.1	
3154.7	3654.2	15.8	Australia
3849.6	4141.8	7.6	
1360.2	1520.4	11.8	New Zealand
911.0	996.5	9.4	
3156.1	3582.7	13.5	Japan
22552.3	24354.0	8.0	
2228.4	2773.9	24.5	Yugoslavia

2. Ireland: expenditure include international fare payments.
3. United Kingdom: including estimates for the Channel Islands receipts and expenditure, and cruise expenditure.
4. Canada: excluding crew international airfares payments.
5. New Zealand: includes international airfares payments.
6. Germany: the data relate to the territory of the Federal Republic of Germany prior to 3rd October 1990. From July 1990, data include all transac German Democratic Republic with foreign countries.
7. Italy: change of methodology in 1990.

じめはともかく、積年の蓄積の結果はいずれ現われざるを得ない。それに安いパッケージ・ツアーであることを売り物にして、ヨーロッパのツアー・オペレーターの50%もが、スペインの海浜リゾートをパンフレットに載せていて、激しく競い合っているとすれば¹¹⁾、環境を考慮にいたした投資を進めてゆく余力も、資力も有りえなかったであろう。

こうして、スペインで'60年代からはじまったマス・トゥーリズムは、前節でみたようにスペイン経済にとっては救世主の役割を果たしたのであったが、地域間格差の解消、失業問題の軽減といった問題群では、かえって深刻化させたと言えるのである。'60年代からほぼ30年、年間300万余の観光客をうけ入れるまでになったスペインの観光産業は、ホテルをはじめとする宿泊施設とそのインフラの建設の機会を建設業に与え、観光業と共生するとまで言われるほどに密接なかかわりを建設業界とつくってきた。雇用の機会を考えれば観光業は、700万人以上の人々をやしなってきたのであった。スペインのホテルの80%は'60年以降に建築されたと言われるが、'60年代初期に近いものはすでに道徳的磨損はもちろん、物理的磨損を受けてきている。スペインのホテルの取容能力は'60年には13万人、'75年には57万人、1986年には86万人とふえてきた。「ちなみに観光地として最も重要なバレアレス諸島のホテル取容能力は約23万人、ポルトガルのほぼ2倍、ギリシアと同規模に達する」ほどになっている。¹²⁾このように巨大化したスペインの観光産業の国際比較を、左の表と次頁の表でみてもらうこととしよう。

Mass tourism の本家、スペインでは観光産業は、右上りに成長を続けるスペイン経済の牽引車として走りつづけることができるのかどうか、Mass tourism に批判が集中してきている今、興味・関心が寄せられる。

しかし、スペインでも、やはり Mass tourism に警鐘は打たれたのであった。どのようにしてか、次章でみてみることにしよう。

1) 『スペイン・ハンドブック』原誠他編 三省堂

表12 ホテル等の収容人員
Capacity in hotels and similar establishments

	Hotels			Motels			Boarding houses			Inns			Others			Total		
	1989	1990	%90/89	1989	1990	%90/89	1989	1990	%90/89	1989	1990	%90/89	1989	1990	%90/89	1989	1990	%90/89
Austria																656.9	650.6	-1.0
Belgium	92.5	93.7	1.3													92.5	93.7	1.3
Denmark																85.0	99.1	16.6
Finland	77.3	82.0	6.1				14.8	15.4	3.9							92.1	97.4	5.8
France																		
Germany	564.8	575.3	1.9				137.0	135.8	-0.9	243.0	240.8	-0.9	246.2	249.3	1.2	1191.0	1201.2	0.9
Greece	356.6	366.4	2.8	3.3	3.5	7.4	18.5	20.7	-11.8	5.1	13.1	158.5	35.0	34.6	-1.2	418.5	438.4	4.7
Netherlands																108.2	110.3	1.9
Norway													105.3	112.7	7.0	105.3	112.7	7.0
Portugal	81.2	88.3	8.8	1.2	1.4	21.2	44.8	45.9	2.4	4.0	4.1	1.6	37.3	39.6	6.2	168.4	179.3	6.5
Spain	708.0	735.7	3.9	210.7	193.8	-8.0	80.2	78.5	-2.1				94.8	94.2	-0.7	1093.6	1102.2	0.8
Sewden	110.0	113.6	3.3				46.3	46.9	1.2							156.2	160.4	2.7
Switzerland	235.7	236.0	0.1	6.1	5.5	-10.0				29.5	28.3	-4.0				271.2	269.8	-0.5
Turkey	105.8	125.8	18.9	3.2	3.2	1.6	4.4	5.1	16.9	2.4	2.4	0.0	2.5	3.7	46.8	118.2	140.2	18.6
Australia	125.7	153.8	22.4	286.0	297.6	4.0										421.7	451.4	7.0
Japan	116.6						94.3			95.6								
New Zealand																		
Yugoslavia	336.7	339.3	0.8	11.4	11.2	-2.4	5.9	6.5	9.8	2.1	-1.9	-7.9	6.1	5.4	-11.1	362.3	364.3	0.6

Notice: this table contains data available bed capacity unless stated in the following notes by country.

1. For the "Types of accommodation covered by the statistics" see Table C.
2. Austria : position at 31st August.
3. Denmark : position at 31st July.
4. Finland : position at 31st December.
5. France : position at 31st December.
6. Germany : position at April; the data relate to the Federal Republic of Germany prior to 3rd October 1990.
7. Norway : position at 31st December.
8. Portugal : position at 31st July.
9. Spain : position at 31st December.
10. Swetzerland : position at 31st December.
11. Turkey : position at 31st December of accommodation establishments approved by Ministry of Culture and Tourism.
12. Australia : position at December.
13. Yugoslavia : position at 31st August.
14. Sweden : position at December.

Tourism Policy.....OECD 1992 から

1982年 504頁。

- 2) J. A. マルティネス=セラノ他著 楠貞義訳『現代スペイン経済—1960年から80年まで』新評論 1987年 1頁。
- J. A. Martinez Serrano et. al., *Economia Espanola : 1960~1980, Crecimiento y cambio estructural*, 1982. Madrid.
- 3) 『スペイン・ハンドブック』p. 505.
- 4) 同上 p. 530.
- 5) 『現代のスペイン・眠りを覚ましたドン・キホーテの国』『現代のスペイン』編集委員会編 角川書店 1992年3月 382頁。
- 6) 『スペイン・ハンドブック』507頁。
- 7) 『現代のスペイン』383頁。
- 8) 図表はいずれも『現代スペイン経済』から, 176頁, 177頁。
- 9) Manuel Valenzuela, Spain; the phenomenon of

mass tourism, in *Tourism & Economic Development. Western European Experiences.*, (ed. by) Allan M. Williams & Gareth Shaw. London 1988. '91. p. 40.

- 10) マドリッドを訪れる割合の高い国は日本で, 他の国々の観光客はまっすぐビーチへ向うそうである。野々山真輝帆『スペイン辛口案内』参照
- 11) M. Valezuela, op. cit. p. 40.
- 12) 『現代のスペイン』387頁。

(II)

地中海とスペインの環境問題

1960年代はじめ, スペインの工業化が始まる。ここでも農業から工業・サービス産業への重点の移行, 農業人口の減少と都市人口の急激な上

昇、「過疎」と「過密」の社会問題の登場となる。そして勿論、また「公害」と「環境汚染・環境破壊」も現われざるをえない。その状況を簡略に述べた部分を引いてみよう。

「過去30年の間に、スペインの都市人口の割合は56%から78%に増加した。最大の集積地は首都マドリッドで、300万の人口を有する。経済は農業中心から工業とサービス（産業）の混合体へと変った。観光業は重要な収入源であるが、また環境ストレスの原因でもある。殊に夏場の地中海沿岸はそうだ。スペインの都市人口の約半数は沿岸の大都市に居住している¹⁾」と指摘されている。

スペインの現在の環境問題はどうか。ヨーロッパの多くの都市と同様、都市の大気汚染の割合は高く、汚染物質の排出量はヨーロッパの平均を超えていて、尚この分野でもヨーロッパ「後進国」であることが解る。

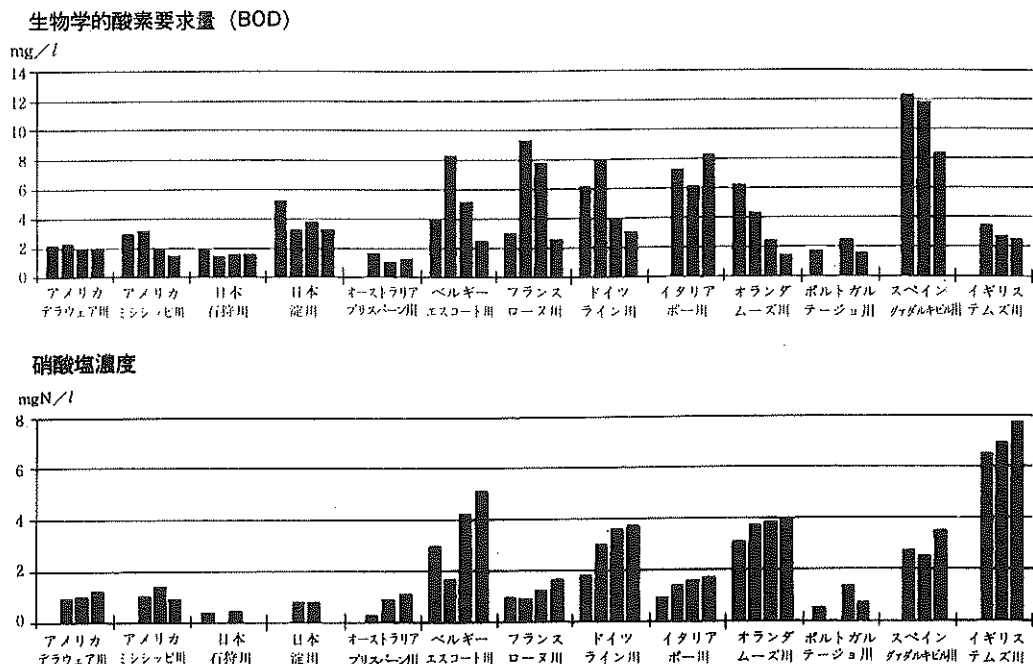
スペインにとって、しかし、目下の最大の間

題は、水質汚染、とりわけ、地中海沿岸のそれである。「貧弱な污水・排水処理施設と海上の石油・ガス生産諸施設が地中海に重大な汚染をひきおこしている。排水処理施設のサービスを受けている人口割合は、1975年には14%、1980年代には48%にまでなったが、依然としてスペインはヨーロッパの近隣諸国の多くの国々の後塵を拝している。²⁾」

これらはまだ工業開発が優先されて、工場の排気・排水処理の基準も、自動車の排気ガス、生活排水の規制もゆるいためであるが、スペインも環境問題の各方面での改善に手をこまねいている訳ではない。

まず1978年憲法第45条で環境保護の重要性が認められ、翌年公共事業・都市計画省の中に、地域・環境整備局と環境問題省庁間委員が設置された。'70年代は一貫して8%弱の右上りの急角度のGNPの増加をみたが、'80年をピークに'85年まで下降、停滞を経験した。1986年のEC

図3 主な河川の水質（1970年、1975年、1980年、1980年代後期）



注：分析は河口あるいは下流の水について行った。

加盟を契機に、大巾な外資導入政策に転じ、自由開放型の外国投資法を設定した。この年以降'90年代はじめまでスペインは'70年代に優る急激な GNP の伸びをはたし、世界の10位に喰いこむ大躍進をとげた。

EC 加盟は、環境問題への取りくみでも、大きな転機となった。EC の環境基準に合致させることが必要となったためである。「EC に加盟することでスペインにおいても本格的な環境対策が導入されつつあるといえる。」³⁾

水質汚染防止では、1985年の水質保全法、排水基準に関する1988年の政令、1988年の海岸保護法が制定された。産業廃棄物では、1986年の政令、有害危険廃棄物に関する法律などが従来の許容基準を大巾に厳しくしていると評価されている。³⁾たしかにその努力は成果をうみだしてきている。『OECD 環境白書1991』によれば、スペインの南部を流れるグアダルキビル川の生物学的酸素要求量 (BOD) は'80年代後半著しい改善、すなわち DOD の数値の低下をみている⁴⁾。BOD は河川の汚濁指標で水質劣化を示す指標であるので、改善は喜ばしいが、ヨーロッパの他の工業生産、商業活動の中心地を貫通するセーヌ・ライン河等と比較してみると、まだまだ3・4倍のひどさである。

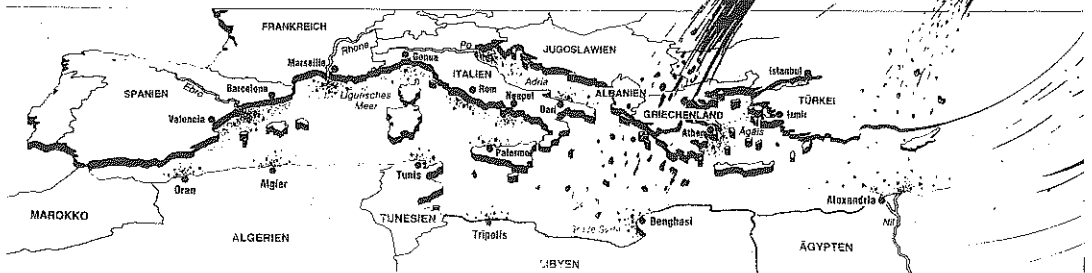
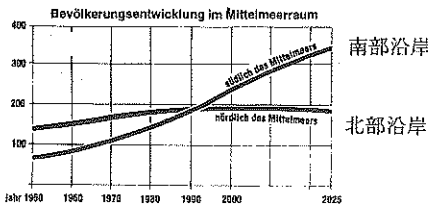
人間や哺乳動物の排せつ物に由来する、汚染の度合を示す指標である硝酸塩の濃度では、こ

のグアダルキビル川は、右上りの増加さえ示し、テムズ川よりは優るものの、ライン川と肩を並べる不名誉な地位をえている。

海洋汚染はどうか。スペインの環境問題の最大のものはここに存する。前にみたようにスペインの大都市はマドリードをのぞけば、過半は海岸にあり、バルセロナをはじめ地中海に面する都市は、観光に依存するところ大である。この地中海こそ、これまでスペインの経済を救う環境であり、工業化は、一応の成果を得たとは言え、尚依存しなければならない「パン籠」であった。がしかし、この環境が危ないのである。ドイツ週刊誌『Die Zeit』(1990年7月6日付)の「地中海レポート」にかかげられた下のイラストをまず見てもらおう。

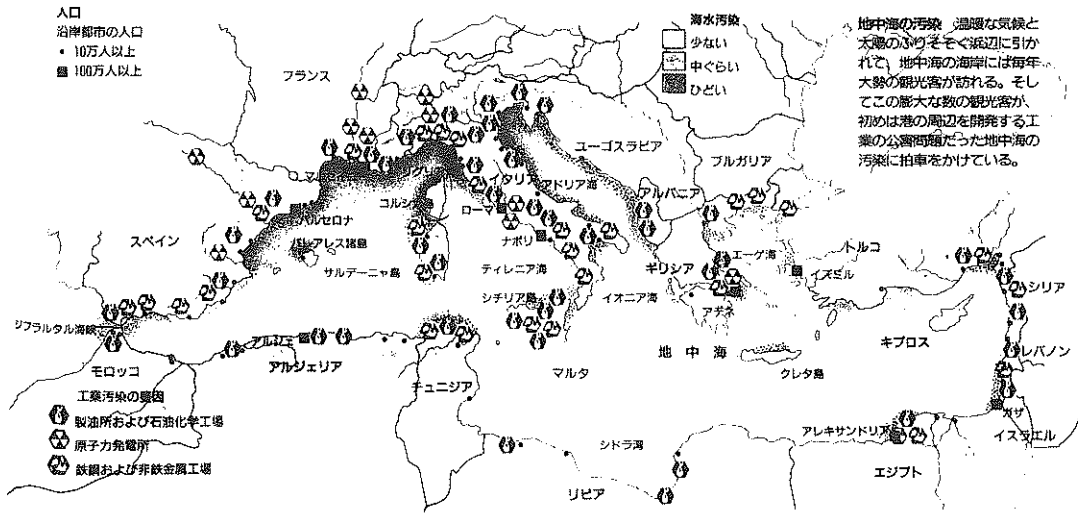
『OECD 環境白書』(1991)は、つぎのように書いている。「地中海は、世界中で最も開発が進んでいる地域海であり、その海岸は、世界で最も汚染されている。地中海は、深く、ほぼ海流のない海で、ジブラルタル海峡の狭い水路で北大西洋につながり、もう一方は、ボスボラス海峡で黒海につながり、スエズ運河で紅海と人工的につながっているほかは、完全に陸地に囲まれている。地中海は海水のいれかわる速度が遅く、完全に入れかわるためには70年かかる。このような性質といくつかの国で沿岸人口が多いことが相まって、地中海を汚染に対して極度に

(百万) 地中海領域の人口増加



“Die Zeit” 6, Juli 1990, S.16

マスからソフトへ、ツーリズムの新動向（内田）



出典『世界再発見1. フランス南ヨーロッパ』1992年
土地と人々。10国共同出版 同胞舎出版 P. 85.
c 1989・1990 Bertelsmann Lexikon Verlag.

脆弱な海にしている」と、まず地中海の、特殊な地学的特徴を指摘した上で、問題の状況を、①工業・観光事業に由来するものと、②交通、③周辺諸国の陸地の環境変化に伴うもの、④それらが海洋生物におよぼす悪影響にわけて語っている。

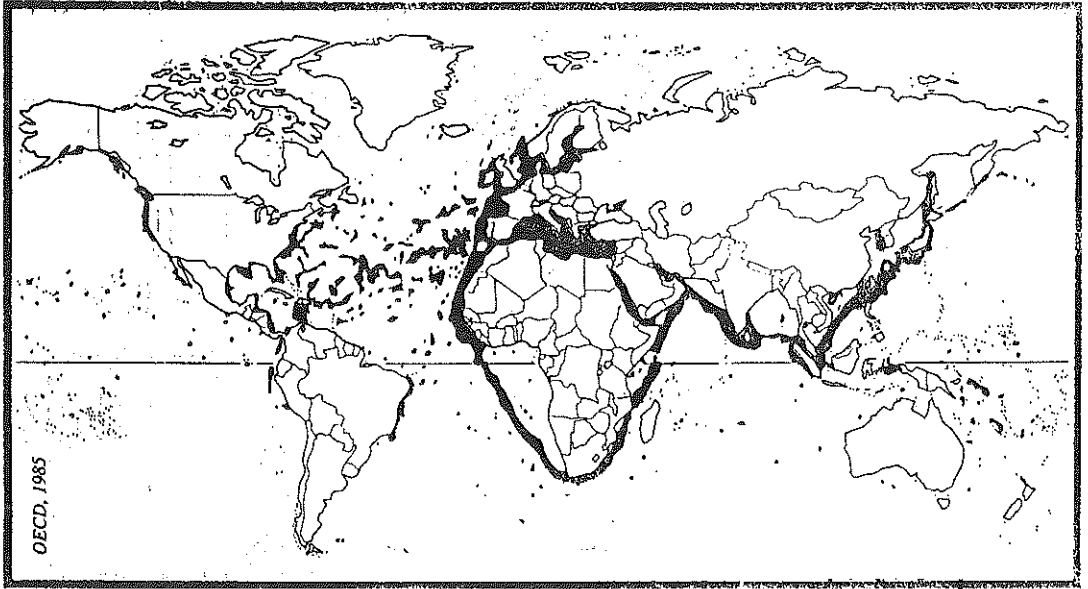
まず①では、「地中海は、下水排水、栄養分、石油、金属、合成有機化合物等による汚染と沿岸の環境改変によって脅威にさらされている。陸上汚染源が特に重要であり、地中海の汚染負荷の85%を占める。例えば、沿岸人口の多さと毎年夏になると集まってくる1億人の観光客は、ただでさえ多量な下水排水をさらに多くする。観光やその他の社会経済活動は、沿岸開発に拍車をかけ、海岸線に大規模な物理的改変を引き起こしている。エbro川、ポー川、ローヌ川などの大河は、すべて、高度に工業化された地域をその流域に持ち、重大な汚染を地中海にもたらしている。これらの圧力は北部沿岸域、特にフランス、イタリア、スペインの沿岸で最も強い」とされている。前頁と上の図が示すように、フランス、イタリア、スペイン三国の地中海の海岸線は、製油・石油科学工場、原子力発電所それに多量の排水をつくりだす鉄鋼・非金属材料でおおわれ、西地中海は工場によって



ベニドルム ここはスペインでも屈指の観光地であるが、この数年開発が著しくなってきた。スペイン政府は観光地開発に伴う景観の破壊を少なくするよう努めている。

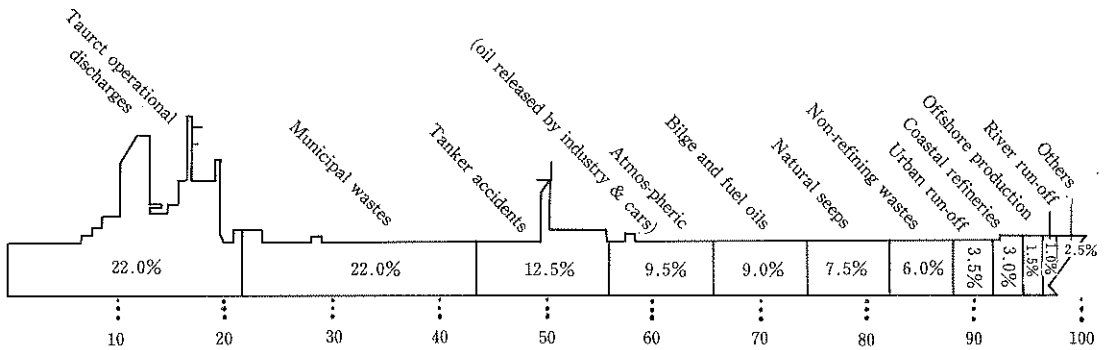
圍繞されているの観がある。また急激に海浜観光地として膨張をとげたりゾート地は、上の写真にみるような、オアフ島のホノルルを思いおこさせるような、乱開発ぶりである。地中海沿岸人口は約3億6000万人、旅行シーズン中は人口はその倍、7億2000万人にふくれあがるとい

廃油による汚染 1980年代後半



油汚染の原因

All percentages are approximate



う。

「地中海沿岸のほとんどの国で、既存の観光地の収容能力は限界にきており、もはや新たな観光地を開発する余地もなくなっている⁵⁾」とまで、評されるほどである。それに紹介されている国連統計によれば、この地域だけで年間4000億ℓの下水からの排水が、地中海に流入しているが、そのうち処理されてから流入してくる量はわずかであるそうである。

『OECD 環境白書』に戻れば、第二の、交通

と言うのは、海上タンカーによる海水汚染である。「世界のタンカーの航行量の約25%が地中海を航行するため、海運による影響も重要である。タンカーからの油含有廃液を受けいれている港湾施設の中には、海底やパラスタックからの油性廃液の排出を十分に処理しきれないものがある。このため、慢性的な低レベルの油汚染は偶発的な事故による流出洩出よりもはるかに危機的である。⁶⁾」

この事態は、『環境地図』から引いて上にのせ

た図からも理解されよう。⁷⁾

第三に、こうした汚染と富栄養化の拡大、拡散は、地中海の生態にも大きな影響を与えずにはいない。スペイン沿岸では、ECの環境基準にかなった水質であることを示す「青旗」が立つ海浜リゾートが、近年ふえてきている一方、同じ地中海でも東部の、イタリアとユーゴスラヴィアにかこまれたアドリア海では、水質悪化による藻(algae)の発生がみられる。「アドリア海北部のイタリア沿岸域に沿って、近年藻が集中的に発生し、海のレクリエーション機能はもちろん、海洋生物に影響を与えている。(中略)大都市に接する閉鎖的な沿岸域の多くでは、汚染物質の堆積と海底生物構造の変化の兆候が見られる。またこの地域では、地中海特有の藻場もトロール漁法の影響をうけている」と。

第四は、内陸地域における環境変化の影響があげられる。ここで列挙されているのは、④スエズ運河による紅海の生物種の進入か、と言うかなり昔の事態もあるが、⑤エジプトのアスワン・ハイ・ダム建設、完成後の沈澱物量の著しい減少が、ナイルデルタ地帯とその周辺地帯の生物資源の生産性を低減させた事実である。

最後に、第四としては海水及び海中生物による人間の健康破壊、衛生問題がある。

「この地域は、特にレクリエーションと観光目的により、集中的に利用されているため、人間の健康に対する懸念が特に高く、海水中の細菌と貝類の汚染に関心が集まっている。下水処理の改善には進歩が見られている一方で、不十分な処理しかされていない廃棄物が海中に投棄され続けている。その結果、汚染された貝類の消費による公衆健康問題が定期的に発生しており、耳・口・皮膚・上部呼吸器系についての伝染病が、特定の地域で発生している。¹⁾

こうした環境汚染、とくに③と④を合わせた複合汚染が劇的な姿で現われたのは1989年の夏、地中海の東部に位置する、ポケット状に、イタリアと、ユーゴスラヴィアにかこまれたアドリア海であった。3週間にわたって、アドリア海に面するイタリアの海岸に、赤、緑、黄色の海藻が大量にうちあげられ、ねばねばした藻

菌類に悩まされねばならず、イタリアのラヴェンナでは司祭が出て、海が凶状を脱して正常に戻るようおいのりをする始末、大量のトラックを動員して、海岸から回収、運搬させねばならなくなったという。⁸⁾

1989年7月のこの地中海の海藻による汚染は、翌年予約客の半減をまねき、'90年7月初旬イタリアでは、海洋捜査船を出して、海洋水質調査を行ない、その健全さ、海藻のない状態を大いにアピールせねばならなくなった。しかし、観光客の不信は根強く、イタリアの海岸は海藻を防ぐ網を海岸ぞいに付敷すると約束せざるをえない事態とまでなった。

以上みてきた地中海の汚染を、観光客は嘆き、休暇が台無しになってしまったと、観光地・リゾートを非難する。しかし、観光客自体も汚染の大きな原因である。デイ・ツァイトの記者、クリストフ・ドレッサーは次の如く指摘している。

「環境問題で苦情を言っている観光客も原因の一つである。スペインだけで観光客のために毎年40kmの海岸線が犠牲に供されている。観光客はとりわけ乏しい飲料水を、毎日400ℓも使いすてる一方、至る所で地下水の水位は低下し、南地中海諸国ではすでに人口の1/3が飲料水に不足している⁹⁾」と。

ではこうした地中海の事態に、どう対応し、どう対処すべきなのか。「病める地中海」のために、既に1976年以降、沿岸諸国の「地中海行動計画」が打ちだされ、毎年地中海環境会議が行われぬ年はないほどとなっている。'90年4月には「ニコシア憲章」が採択され、2025年までに沿岸諸国とECは浄化することを義務としたのであった。しかし、そこで、世界銀行とヨーロッパ投資銀行が融資することがきめられた資金も、使途もぼうばくとしたままだという。

汚染因の大半は陸地にあり、工業、農業、観光業の排水・廃棄物のそれに沿岸住民の生活雑排水と下水が地中海に流れこむのが問題と解っているとしても、それら問題因を陸地で処理し、地中海に負荷をこれ以上おわせないようにするには、その処理諸施設を沿岸諸国が設けねばな

らない。その費用をどう調達すべきか、それに沿岸諸国といっても、フランス、イタリア、それに少し下ってスペインと第一世界に属する国々と、モロッコ、チュニジア、アルジェリア、エジプト、リビア、トルコ、ギリシア、ユーゴスラヴィア等の第三世界の国々があり、内部に南北問題の対立をはじめ、数々の問題での対立でもつれあっていて、同一卓につくのすら難しい国々である。そのなかでどう「地中海行動計画」が行動しうるのか、極めて困難と言わねばならない。¹⁰⁾

国連の環境団体である UNEP (United Nations Environmental Programme) = 国連環境計画は、1989年に2025年までに地中海とそれを囲む空間がどうなるか、予測を発表した。さまざまな条件を仮定したうえで、警告的ではあるものの、最も肯定的な予測はこうであった。

- ・ 地中海沿岸の都市人口は、今日の8200万人から1億5000万人から1億7000万人にまで上昇する。その際地中海南部は北部沿岸より12倍にも急激に成長する。

- ・ 観光客の波は更に一層ふくれあがり、現在の1億人から2億6000万(年間)にまでなるう。

- ・ 都市の廃水は、北部沿岸では65%増加する、南部では3倍にまでなるだろう。

- ・ ヨーロッパ共同体に属する地中海沿岸諸国の自動車駐車場は、1980年からみると、60%だけしか増えないが、北アフリカでは13倍にもふえる自動車用地を計算しておかなければならない。

- ・ 北部の工業生産はほとんどもうこれ以上成長しない。一方南部ではセメント工場や鉄鋼企業が続々と立ち上ってくるだろう。

- ・ 地中海南岸の国々の2倍にふくれあがる人口が、その食糧と安心して口に入れられる飲用水をどこで手に入れるのか、どこで生きてゆけるのか、誰にも解らない。この急激な発展が環境にとって耐えられるのかどうかは、したがって、地中海南岸の、第三世界の諸国政府にとって現在のところでは、まだ第二義的な問題である。

つまり、地中海全体を視野に入れる場合、北の第一世界に属する先進国は、地中海を環境汚染から救うことを考慮にいれた政策を取りうる余裕を、人口増加、工業生産増加の停滞から手に入れられるのに対して、南岸諸国政府にとって、そのような余裕はおろか、第二義的な意味しかもたず、政策的にも資金的にも環境改善の国内投資を進める力はない。

したがって、現在のところでは、都市の下水、廃水それに工業・農業等の雑廃水が北部沿岸を汚染しているが、政策的にも資金的にも改善の試みが行なわれる余地があるのに対して、今後南部で環境破滅が「開発・成長」のために進むにしても、改善が進むことはまず期待できないということであろうか。

地中海沿岸諸国にとって、否、地中海という天与の環境、自然をエンジョイしてきた人々にとって、未来は決して明るくはないということになる。これは地中海沿岸リゾートを、経済成長のための補助エンジョイとして上昇に利用してきたスペインにとっては、重大なことと言わざるをえない。マス・ツーリズム、英独仏といった先進国の旅行者、観光旅行業者が、ヴァカンスの機会を与えられた勤労者を組織して、海岸のコロニーへと運びこみ、スペインの低物価、低賃銀によるサービスを受け、経済開発の手が及んでいない「汚れない自然景観」を、安い費用で手に、いや、身体いっぱい陽光をうけてエンジョイする、といった「今日のユートピア」を提供する観光産業も同様である。

個々の観光産業に従事する資本が問題ではなく、又そこで働く機会を得ている雇用者が問題ではなく、スペイン政府にとって、経済運営、経済計画の基盤そのものにかかわる問題として、地中海環境汚染と環境産業の打撃がとらえられるのである。従来の地中海中心の観光路線には大きな見直しが必要だし、それに代る戦略が立てられねばならない。

1) 1993 *Environmental Almanac*. Compiled by World Resources institute. 1993 New York p. 558

2) 『現代のスペイン・眠りを覚ましたドン・キホーテ』

の国]「現代のスペイン」編集委員会編 角川書店 1992年3月 385頁

3) 前掲書 386頁

4) 『OECD 環境白書』 OECD (経済協力開発機構) 環境委員会編 環境庁地球環境部監訳 中央法規 平成4年 61頁

OECD *The State of the Environment 1991*. OECD

5) 『世界再発見 I フランス・南ヨーロッパ』1992年土地と人々, 10国共同出版 同朋舎出版 84頁

© 1989・1990 Bertelsmann Lexikon Verlag.

6) 『OECD 環境白書』89頁

7) *WWF. Atlas of the Environment*, by Geoffrey Lean & Don Hinricksen. 1990. 1992 Helicon. Oxford. G. 13. p. 174~5.

8) *Die Zeit. Das Mittelmeer — Badewanne und Kloake in einem*, 1990年7月6日付

9) *Die Zeit. Ebenda*, S. 15.

10) この「地中海行動計画」については、ここではふれることはできないが、下記の書が参考となるだろう。

Peter M. Haas; *Saving the Mediterranean. The Politics of international Environmental Cooperation*. New York 1990 303 p.

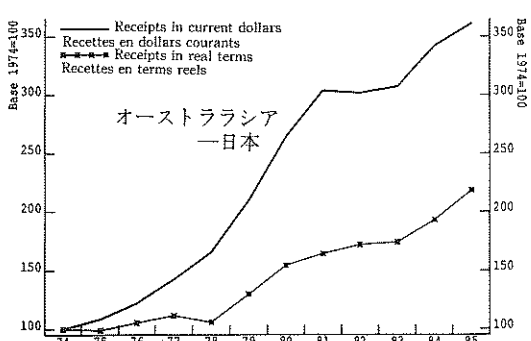
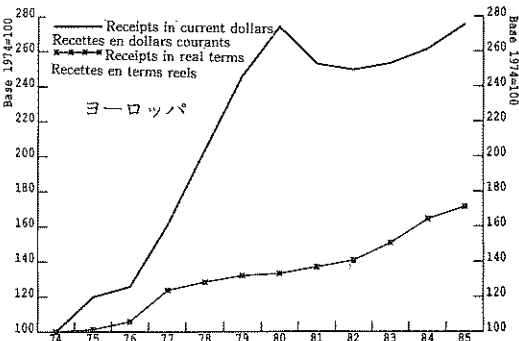
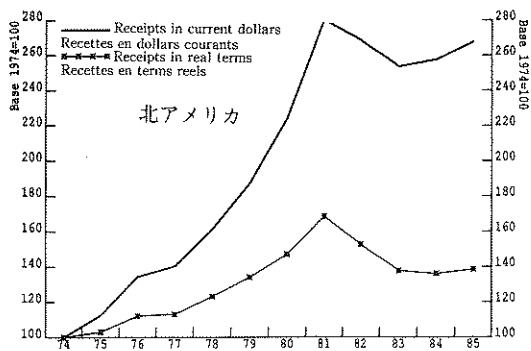
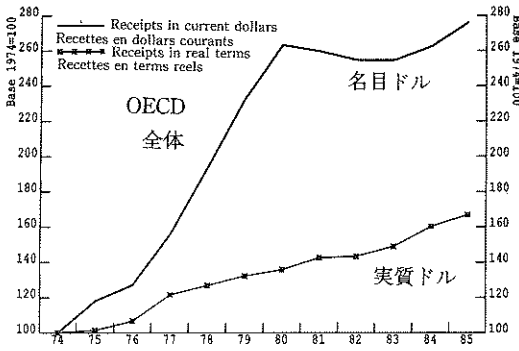
(Ⅲ)

1980年代末の観光客減少のショック

『OECD 環境白書』は、マス・ツーリズムによる環境破壊に警鐘を鳴らしていた。それはとくに、世界の観光客数の25%を占めるヨーロッパの人々の、その40%が地中海に集中していて、過度利用になっているからであった。「同時に同じ場所にあまりに多くの旅行者がつかけることは、マス・ツーリズムの季節的かつ地理的集中による特徴的な状況であり、環境破壊の根本的な原因である。(中略)地中海地域の既存の観光地のいくつかにすでに過剰負担の危険が増大している。(中略)観光の環境に与える影響は、観光そのものが拡大するにつれ増大するものと思われる」と。

下図でみるように、ヨーロッパ内での旅行者受け入れ収入の伸び率は、オーストララシア、日本、北アメリカのそれにはるかにおよばず、飽和状態に近づきつつあることを教える。また、

観光収入のトレンド



Tourism Policy and international tourism in OECD countries 1990 Paris から

国別のうけいれ数の伸びでも、オランダ、イギリスに次ぐ最低から三番目、なかでも1985—89年にかけての伸び率の落ちこみが著しい。スペインは、観光客のうけいれ先としての能力がなくなりかけてきたのかと、懸念された。

地中海沿岸環境の過度利用のつけは、観光客の減少となってスペイン経済を襲った。地中海の汚染とペセタ高を忌難した英国人、ドイツそしてベネルクス三国、スカンジナビアの国々はほぼ2ケタの減となったのである。減少は値段の張るホテル客に著しかった。¹⁾

1987年、9244万4千人の延ホテル宿泊客数のピークから、'88年8835万1千人と4.4%の落ちこみ、'89年には7830万1千人と11.4%の減へと転落した。観光収入が国民総生産(GNP)の5.1%、財、用役輸出額の25.7%を占める(いずれも1987年)、観光に依拠するところ大な国だけにこの落ちこみは影響大であったろう。1990年のそれは、3.8%、21%とそれぞれ著しい。工業立国化の努力が進められ、'92年のセヴィリア万国博、バルセロナのオリンピック開催へ向けて国内での投資が大いに図られていた時期であるにしても、この観光収入のおちこみの経済へのインパクトは大きかったに違いない。(事実、このためスペイン政府当局は、新たな観光政策を提起することになる。その詳細については後述することとする。)

ではこの落ちこみを、OECDの『観光政策と国際観光(Tourism policy and international tourism in OECD member countries), 1992』はどう考えているのかを見てみよう。

「スペインは2年引き続いて入国者数の下落を記録した。アメリカ市場が約12%下った一方、下落は、大部分入国者総数の90%余を数えるヨーロッパ市場からの成績がより悪かったためであった。もっとも悪かったイギリスは、14%以上もおちこんだ。太陽と海浜休暇パック、ツアー部分に集中していた落ちこみは、北ヨーロッパの伝統的なパック休日市場(Package holiday markets)が、地中海の太陽と海岸を目指す一般的なトレンドからはなれつつあることを映しだしている。²⁾

同誌によれば、このトレンドは'80年代後半から顕著となってきているのであって、その原因は二つ挙げられる。まず第一は、スペインの価格上昇だが、これには(スペインへの)送り出し国の景気後退もからんでいる。

第二は「伝統的に、人気の高かった地中海沿岸リゾートで汚染が増加していること」による。

スペインの政府当局も1983年以来、沿岸の自治体と共に、海岸のクリーン・アップに乗りだし、'83~'91年の期間にわたって340億ペセタ(約276億9000万円)を投入することとしている。が、しかし、この投入にも拘らず、同書は、入国、宿泊客の呼び戻し策の成功には悲観的であるようだ。何故なら、同書は、続けて次の如く記しているからだ。

「旅行経験が増すにしたがい、又北ヨーロッパの観光市場が洗練されたものになるにつれて、余暇旅行者は環境を一層意識するようになった。またますます汚れない、汚染されていない目的地を探すようになっていく(in search of unspoilt and unpolluted destination)。彼らは質のかわりに低廉な価格をえらぶ意向をますますなくしている、団体休暇市場のお値打価格帯でさえも質をえらぶようになっていくようにみえる。」

この事情に加えて、北ヨーロッパの人々は一度にどっかと長期の休暇をとるのではなく、旅行慣れしてきて、数回にかけ、より短期間の旅行をするようになってきた。3泊の旅行を数度というのが、外国旅行者の20%の行動様式となりつつあると『観光政策と国際政策』は、近年の旅行者の行動動向を告げている。そして、スペインと関連するところでは、治安、テロ、湾岸危機が続き飛行機を利用する旅行が危険となり、検査や航空管制で時間もかかる、計画を立てにくくなったという事情、それに自動車の旅もヨーロッパではますます混雑、渋滞がひどくなってきていることから、自動車での旅行がみなおされつつあるようだ。「ここ10年間を通して市場占有率が下落しつつけた後、鉄道輸送が、いくつかの地方では、殊にヨーロッパでは、健全な成長を示しはじめている。これは主に、鉄道

のサービス向上によるが、特に（フランスの）TGV や（ヨーロッパの各都市を結ぶ）都市間急行のような高速鉄道網が拡大されていったためである。時間を気にするビジネスで客であろうと都市観光客であろうと、都市間旅行者 (inter-city travellers) にとって、それらは（飛行機、自動車に代る）代替的交通手段を提供している。³⁾

何故これがスペインに関連すると言うのかと言えば、スペイン旅行の大きなネックにあげら

れているのが、アクセスの不便さ、未整備であったからである。

『スペイン辛口案内』で野々山真輝帆氏は、スペイン経団連の研究によるとした上で、以下のように指摘している。

「陸海空路とも、まだ交通機関の組織化がなされていない。他のヨーロッパ諸国からの個人客の50%は自家用車で来る。パッケージツアーの40%はバスで乗りこむ。渋滞や事故が多いためハイウェイの旅は快適とはいえない。ス페이

外国人 ホテル利用客数
SPAIN
NIGHTS SPENT BY FOREIGN TOURISTS IN HOTELS
(by country of nationality)

	1988	Relative shave	1989	Relative shave	% Variation over 1988
Austria
Belgium	3 698 174	4.2	3 456 487	4.4	-6.5
Denmark	1 275 846	1.4	1 073 560	1.4	-15.9
Finland
France	7 115 042	8.1	7 049 426	9.0	-0.9
Germany	24 635 737	27.9	21 791 970	27.8	-11.5
Grece	84 078	0.1	99 195	0.1	18.0
Iceland
Ireland	196 135	0.2	150 897	0.2	-23.1
Italy	4 650 705	5.3	4 587 802	5.9	-1.4
Luxembourg	240 737	0.3	255 199	0.3	-6.5
Netherlands	3 324 088	3.8	2 810 356	3.6	-15.5
Norway	430 624	0.5	299 475	0.4	-30.5
Portugal	687 368	0.8	683 368	0.9	-0.6
Spain
Sweden	1 211 566	1.4	1 182 807	1.5	-2.4
Switzerland	2 400 842	2.7	2 171 330	2.8	-9.6
Turkey
United Kingdom	31 291 489	35.4	25 253 002	32.3	-19.3
Other OECD-Europe
Total Europe	81 242 431	92.0	70 834 874	90.5	-12.8
Canada	182 900	0.2	177 846	0.2	-2.8
United States	1 756 732	2.0	1 835 837	2.3	4.5
Total North America	1 939 632	2.2	2 013 683	2.6	3.8
Australia
New Zealand
Japan	639 230	0.7	857 065	1.1	34.1
Total Australasia and Japan	639 230	0.7	857 065	1.1	34.1
Total OECD Countries	83 821 293	94.9	73 705 622	94.1	-12.1
Yugoslavia
Other European countries	2 000 685	2.3	2 149 697	2.7	7.4
Latin America	1 190 002	1.3	1 164 819	1.5	-2.1
Origin country undetermined	1 339 017	1.5	1 281 268	1.6	-4.3
Total non-OECD Countries	4 529 704	5.1	4 595 784	5.9	1.5
Total.	88 350 997	100.0	78 301 406	100.0	-11.4

1. Nights recorded in hotels with "estrellas oro" (golden stars) and "estrellas de plata" (silver stars).
Tourism Policy and international tourism in OECD countries 1990 Paris から

ンの鉄道の旅を組織する代理店が他の国にないため、予約が困難なので列車の客は少ない。またイベリア航空は競争相手が無いのでサービスがよくない⁴⁾と、まあさんざんである。

ちなみに、スペイン経団連の研究では、'88-'89年の外国人観光客の減少の原因として、

- ① ペセタ高と物価上昇により、スペインは安い(お値打な)国ではなくなった。
- ② 上記したようなアクセスの不便さ。
- ③ 公共サービスの悪化、環境、騒音問題、を列挙している。

①、②はともかく、サービスの悪化……とは何か。『スペイン辛口案内』では、「ホテルは訓練された質の高い従業員が少なく、人件費が高いために必要な人員が確保できない。したがってサービスはよいとはいえない。また庭や公園

を充実させて、リラックスできる眺めを提供する必要がある。さらにすりや強盗などがふえ、都市の治安は悪い」となっている。

下表にみるように観光業は国内総生産(GDP)の5~4%を生み出す重要産業であり、直接、間接ふくめて100万人以上の雇用をもたらしている。公共部門の労働者が比較的厚遇されている一方、民間部門で未熟練で済むとされる観光部門では低賃金が一般的で、不人気、人材が集まらないというのであろうか。

スペインの海浜リゾートの利用は夏季に集中する。1月~3月が14.3%、4月~6月が22.2%、7月~9月が44.7%、10月~12月が18.3%というように夏季に観光客が集まり、残余は閑散としたものである。外国人観光客が、スペインのなかでも特に集まるのは、バレアリス諸島、

国内総生産に占める旅行収入項目の割合
Ratio of the "Travel" account receipts to the gross domestic product (%)

	1985	1986	1987	1988	1989	1990
Austria	7.8	7.5	7.6	8.0	8.5	8.5
Belgium-Luxembourg	2.1	2.0	2.2	2.3	2.0	1.9
Denmark	2.3	2.1	2.2	2.2	2.2	2.6
Finland	0.9	0.9	0.9	0.9	0.9	0.9
France	1.5	1.3	1.3	1.4	1.7	1.7
Germany	0.8	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7
Greece	4.3	4.6	4.8	4.5	3.7	3.9
Iceland	1.5	1.6	1.6	1.8	2.0	2.2
Ireland	2.9	2.6	2.9	3.0	3.1	3.4
Italy	2.0	1.6	1.6	1.5	1.4	1.8
Netherlands	1.3	1.3	1.3	1.3	1.4	1.3
Norway	1.3	1.5	1.5	1.7	1.5	1.5
Portugal	5.5	5.3	5.8	5.8	6.0	6.0
Spain	4.9	5.2	5.1	4.8	4.3	3.8
Sweden	1.2	1.2	1.3	1.3	1.3	1.3
Switzerland	4.5	4.0	3.9	3.9	4.0	3.8
Turkey	2.1	1.6	2.2	3.3	3.2	3.0
United Kingdom	1.5	1.5	1.5	1.3	1.4	1.4
EUROPE	1.9	1.8	1.8	1.8	1.8	1.9
Canada	1.1	1.3	1.2	1.1	1.1	1.2
United States	0.5	0.5	0.5	0.6	0.7	0.8
NORTH AMERICA	0.5	0.5	0.5	0.7	0.8	0.8
Australia	0.8	0.9	1.1	1.3	1.1	1.2
New Zealand	1.8	2.2	2.7	2.3	2.3	2.3
Japan	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
AUSTRALASIA-JAPAN	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.3
OECD	0.9	0.9	1.0	1.0	1.1	1.2

Source: OECD, Balance of Payments of Payments Division and National Accounts of OECD Member Countries.

なかでも最大の島であるマヨルカ島である。バレアリス諸島は、1989年外国人観光客の35.9%をひきうけるのである。堀田善衛氏は1982年のエッセイで以下の如く語っている。

「なにしろ、マイヨルカ、メノルカ、イビサの三つの島とそれに付属する二つの人の住む小島を含めてバレアレス群島と呼ばれるここに、年間を通じて航空機で約600万人、船で90万人以上の観光客が来るのであるから、これはもう観光用島とでも言うより他に呼び方も何もないというものかも知れない。600万人といえ、それは首都であるマドリードの人口をはるかに超えていて、このバレアレス群島自体の総人口約40万人の15倍ということとなる。⁵⁾」

これほどに、夏季には利用されるのであるけれども、他のシーズンの落ちこみは激しい。氏

の続きはこうである。

「それはもう空恐ろしいような数字であるけれども、実際に、たとえばオフ・シーズンに来てみれば、それはけばけばしいことにも何にもなっていないくて、観光客たちはホテルその他の観光用の施設とバスなどの限られたところにて、別になんということもないのであって、それはあっ気ないくらいのものである。農民は農業に、漁民は漁業に従事しているものであって、観光案内や、ホテルなどの土建業は主として本土から来た人々がやっているとのことであつた。ただ観光地におけるドイツ人たちの振舞い方が多少目に余るくらいのものである。⁶⁾」（下線は内田）

つまり、観光業に従事する人々は、夏季の季節労働者で、かなりの部分は残余期間、失業労

財・サービス輸出にしめる旅行収入の割合
Share of "Travel" account receipts of goods and services

	1985	1986	1987	1988	1989	1990
Austria	16.8	18.1	19.0	18.9	18.6	18.4
Belgium-Luxembourg	2.0	2.1	2.3	2.4	1.9	1.8
Denmark	5.5	5.9	6.1	5.9	5.4	6.0
Finland	3.0	3.1	3.5	3.5	3.4	3.4
France	5.2	5.2	5.4	5.5	5.9	5.9
Germany	2.1	2.1	2.1	2.1	2.0	2.0
Greece	20.1	23.2	22.2	21.1	17.7	19.4
Iceland	3.5	3.9	4.5	5.3	5.5	5.7
Ireland	4.5	4.5	4.5	4.5	4.4	5.0
Italy	8.1	7.7	7.8	7.3	6.4	8.0
Netherlands	1.9	2.2	2.2	2.1	2.1	2.0
Norway	2.6	3.7	3.9	4.1	3.3	3.1
Portugal	14.2	15.6	16.6	16.2	15.5	15.6
Spain	21.1	25.8	26.1	24.9	22.5	21.0
Sweden	3.1	3.3	3.7	3.6	3.7	3.6
Switzerland	8.7	8.4	8.5	8.1	7.7	7.5
Turkey	9.6	8.8	10.2	13.1	13.5	14.7
United Kingdom	3.5	3.8	4.0	3.8	3.5	3.7
EUROPE	5.1	5.4	5.6	5.5	5.2	5.4
Canada	3.5	4.4	4.2	4.0	4.2	4.3
United States	4.8	5.2	5.3	5.4	5.8	6.4
NORTH AMERICA	4.5	5.0	5.0	5.1	5.5	6.0
Australia	4.4	5.2	6.4	7.4	6.4	6.9
New Zealand	5.5	7.8	9.3	8.5	8.4	8.2
Japan	0.5	0.6	0.7	0.8	0.8	0.8
AUSTRALASIA-JAPAN	1.1	1.2	1.5	1.7	1.5	1.6
OECD	4.4	4.7	4.9	4.9	4.7	5.0

Source: OECD, Balance of Payment of Payments Division.

働者となる。これでは、優秀な人材が来る筈もない。スペインの1984年の第四半期の失業率は18.43%、286万9000人にのぼり、うち新規就業希望者が111万9000人と、学校を卒業しても職のない人々が全体の39%を占めるが、それ以外のそれまで就業していて失職した人々のなかで、最大の割合はサービス部門の60万1000人、全体の21%を構成する。工業部門が50万1000人(17.5%)⁶⁾と次ぐのであるから、サービス部門は、できればさげたい、不安定な職場となる。

さてこうした問題を抱えたスペインの「パン箆」である観光産業は、この事態にどう臨もうとするのだろうか。

次章で、それをみってみることとしよう。

- 1) *Tourism policy and International tourism in OECD Member countries*. OECD Paris © 1990. p. 178
- 2) *Tourism Policy*..., OECD Paris 1992 p. 8.
- 3) Ob. cit. p. 14.
- 4) 野々山真輝帆『スペイン辛口案内』晶文社 1992年258頁
- 5) 堀田善衛『精神の行方—スペインに在りて—』岩波書店 201 197・8頁
- 6) 丸紅広報部編・佐野貢『スペインはいま、商社マンの目 ヨーロッパ新時代の焦点』ダイヤモンド社 1989年 159頁

(IV)

スペインの新たな選択

新しい途を求めて

1989~90年と2年間続けて、入国者も延宿泊客数も減少した観光立国スペインは、'90年この反省から新しい指針と政策を打ち出した。マス・ツーリズムから、質を重視する観光旅行へと、スペインの観光業のあり方を変えてゆかねばならないというのであった。

その紹介に入る前に、まず従来から観光業とそれに関連する分野のインフラストラクチャーの改善のために、政府がすすめてきた政策、施策を見てみることにしよう。

第一は、スペインで唯一の完全独占企業であった国営イベリア航空、これはサービスが悪いと酷評されていたが、この独占をやめ、より

低廉な運賃を実現しようと、第二、第三の航空事業を認可したことである。ビインター航空(Binter Air)とチャーター専門のヨーロッパ航空(Air Europa)がそれであった。

第二は、道路の整備と複線の鉄道の網をひろげることである。(スペインを訪れる観光客の62%¹⁾は自家用車、バスで陸路をたどってくるのだから、これは遅すぎる対応と言える施策であろう。)

第三は、宿泊客一人当りの敷地面積を増やすよう宿泊施設にもとめる施策で、狭い海岸線に林立、乱立するホテル、ペンション等の過密状況の再現を避ける目的であった。バレアレス諸島の自治政府は新設ホテルには宿泊客当り60m²の敷地面積を持たないと許可しない政策をとっている。(次頁に掲げる写真をみれば、リゾートと言うよりは、日本の温泉都市、熱海、別府を連想させる景観である。)

第四は、レジャー・レクリエーション及びスポーツ諸施設の建設。これが進行中である。

第五は、環境の美化、浄化、とくに海浜の浄化である。EECの基準をクリアーして、「青い旗」をなびかせている海浜の数は増えているようである(1991年)。

第六は、治安の維持。夏季には(high season)、観光客のよく廻る地域に警官を増員する。これは内務、環境省の指令によって行われるというのである。

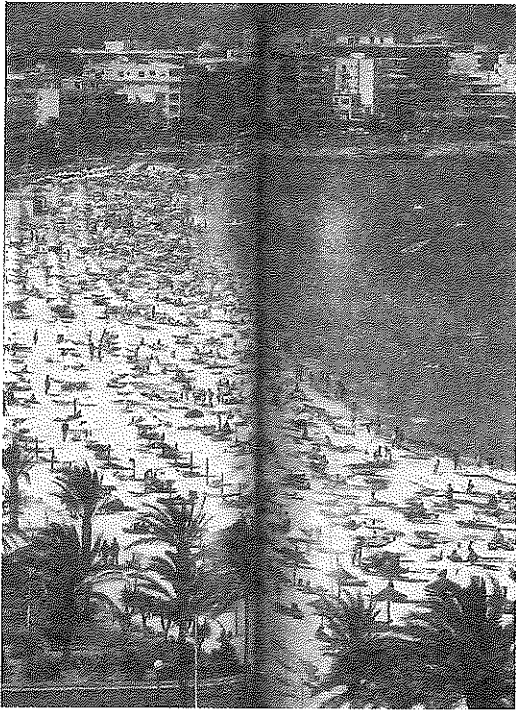
第七は、環境に関しては、公共事業、運輸省内に、環境庁を設けてあたらせ、改善をみているというのであった。

こうした改善策の施行に当っては、観光庁と環境庁が協同して行なうことになっている。

以上が今日まで進められてきた既存の政策、施策の概要であった。一言で評するとすれば、今迄受け入れてきたマス・ツーリズムがもたらすこととなった問題あるいは矛盾を解消しようとする、対症療法的施策だとして良いだろうか。

新政策——インフラ整備と新しい観光業

スペイン観光局が『スペイン観光白書』で提



太陽と海と砂 夏は乾燥して暑く、冬は穏やかなバレアレス諸島の地中海気候に休暇を楽しむ人びとが1年中訪れる。観光客は海岸に集中するが、青銅器時代の住居跡やバルマのゴシック建築の大聖堂をはじめ、印象的な史跡が残っている。

『世界再発見Ⅰ フランス・南ヨーロッパ』P. 60 f. から

起する新政策は8項目にわたる。

① ホテルのインフラストラクチャーを今日的なものとする。

② 競争力を回復するために質の高い観光を推進する (quality tourism)。

③ 販売をすすめるため、さまざまな商品を提供する。

④ EC 市場外の国々を獲得、殊にアメリカ合衆国市場を回復し、日本市場を開拓すること。

⑤ 文化観光 (cultural tourism) を、たとえばサンチャゴ (コン・ポステーラへの) 巡礼の道²⁾、銀の道 (the Silver trail)、絹の道 (the Silk Route)、ケルトの道 (the Celtic Route) といった文化的伝統を、大いに推進する。

⑥ 環境保護と合致する観光開発をする。

⑦ 農村観光 (Rural tourism) と今迄のものとは違う観光 (Alternative tourism) を支援する行動。

⑧ EC 内部で求められているようなものへと、運輸機関の自由化に対応してゆく。

これらの政策指針は、安い料金でも大量に入れて稼ぐという、マス・ツーリズムからの脱出、英国、ドイツ、フランスといったスペインが今迄大の得意先としてきた国々の旅行代理店 (ツアー・コンダクター) 主導の観光客受け入れ等を反省し、'90年代へ向けて欧州だけでなく、アメリカ合衆国、それに日本まで加えて新しい観光戦略を立てたものといえるだろう。豊かな可処分所得を持ち、有給休暇もたっぷりとあり、しかももう一世代近く、夏季長暇を「太陽と海浜」で経験してきた「もう目も肥えてきた」第一世界の観光客をスペインにつなぎとめるにはどうすれば良いかを考えての指針である。

とは言え、この8項目を見るかぎりでは、これが「新路線」あるいは「もう一つの観光政策」とは、仲々受け取り難い。当然の施策と、評価するしかない。しかし、'60年代からのスペインの観光路線、観光商品 (宿泊施設も含めて) の歴史をふりかえってみると、その「新しさ」が了解される。

『ヨーロッパの観光業 (Tourism in Europe³⁾)』の著者、R. グヴィドソンは、農村観光へとスペインが転向してゆこうとしているのを、以下の如く理解している。

何故西ヨーロッパの人々がスペインに背中を向けようとしているのか。それは休暇先の環境の質に対する態度 (attitudes toward the quality of the holiday environment) が変わってきたからだと彼は考える。

「30年前、ベニドルム (Benidorm)、ロレット・ド・マル (Lloret de Mar) やトレモリーノス (Torremolinos) といった場所は、絵のようにきれいだが、ただの貧しい漁村だった。マス・ツーリズムの爆発がこれらの漁村を拡散した海浜リゾートへと変え、他国のヨーロッパの人々の止まるところを知らない需要だと思えたものを満足させるために、多くはその場限りの無計画的なやり方で、リゾートをつくってきた。始めは、これらのリゾートは、この新しい、物

をよく知らない市場の必要に良く適合していた。初めて海外で休暇を買うことが出来たばかりの市場だったから。狭い部屋、薄い壁、外部施設 (Exteriors) は基本的なものだけといった高層建築物でも、ほとんどの観光客には受け入れられていた。これが彼らの経験するはじめてのホテルだったからだ。旅行者者 (Tour Operators) は、ホテル側に、提供する料理やエンターテインメントを英国化あるいはドイツ化する (to anglicise or germanise) ことを忠告していた。⁴⁾

こうして出来上がったホテルをはじめとする宿泊施設が、いかに雨後の筍然であったかは、1945年から'67年までに建てられたホテルがホテル全体に占める割合 ('50年代基準) が、スペインの場合80%になる事実から理解されよう。(ちなみに、アメリカの場合70%。フランスに至っては僅か14%しかなく、'65年以降ようやく新築の努力が進みはじめたとのことである。⁵⁾) とは言え、最新のモダニズム様のコンクリートと鉄の建築物群が海浜に立ちならんでいったのである。(1977年夏季シーズンに向けて予約用に、客に無料提供されるリゾート・ホテル・ペンション案内の小冊子が手元にあるので見てみると、期間、宿泊日数別に、価格を示して、ホテル・ペンションの外観、室内、そして外部施設 (プールや食堂) を写真で紹介して便が図られているが、海浜と建築物群をうつす地域写真は、地域別に一葉しかなく、しかもビーチやビーチをはるか遠望するものしかない、これが何故かは、今これを読んで納得できた。古くからの観光地でさえこうなのだから、規制もほとんど無い寒村の浜辺に開発の手が及んだベニドルムは、もう写真でみるかぎり、ワイキキとうり二つである。)次頁はその小冊子の1ページの縮小コピーである。

こうしてできあがった、リゾート地を、'80年代後半からの西欧の観光客はどう見、どのような判断を下すのであろうか。ダヴィドスは、続けて言う。

「自分たちの家屋の居住条件も上昇し、環境の質にも関心を寄せるようになると西ヨーロッ

パの人々の休暇への期待は、時とともに、より洗練されたものへとなくなっていった。1970年代の後半までに、スペインの汚染された海、有毒な水そして汚ない海浜の新聞報道は、スペインに最大多数の観光客を伝統的に送りだしてきた国々ではしだいにあたり前のこととなった。同時に、安上りの休暇先としてのスペインの評判ももう実情に合わなくなり、観光客はますます、でかい顔したがさつ者 (larger louts) や不良・愚連隊 (hooliganism) といった話をたずさえて家へ帰ることとなった。⁶⁾

'80年代英仏とりわけドイツの経済不振によって伝統的な出稼ぎ先を失ったスペインは200万から300万にもなる失業人口を自国内にかかえこみ、失業率は最悪では'86年の21.5%、最良で'81年の14.4%、'90年では失業者は250万人、失業率16.7%を、経験することとなる。ただただ消費者、観光客として、たがのはずれたリゾートでの旅のはじはかきすての風のライフ・スタイルを、傍観させられるスペインの若者や失業者たちの反感や嫌悪、そして勿論盗み、ひったくりといった犯罪は、豊かな西欧人に不気味なものを感じさせるのであろうか。『スペイン辛口案内』の野々山氏は浮浪者や麻薬中毒者の多い現実の状況をやはり失業からみている。「フェリーペ・ゴンザレス (社会労働党党首で現首相) は82年の総選挙の際に雇用の促進を約束しながら、公約を果せないでいる。職は家族持ちの、経験のある成人男性に優先的にまわされる。犠牲者は初めて職を求める若者、女性、身障者、45才以上の失業者で彼らはなかなか仕事にありつけない。このため多数の若者が疎外感に悩み、麻薬に走る。⁷⁾

こうして今、スペインは環境を意識するに至った観光客に、背中を向けられては、最大の国内問題の1つである失業問題を解消するどころか、ますます激化させることになってしまう。何故なら観光産業に従事する人口は約58万4000人、全労働人口の4.9%を占め、ホテル等の建築に関わる建設産業は98万8000人で8.1%、約150万人程度が直接、間接に観光産業で生活していることになるからである。加えて観光産業は、

In SANTA PONSA bieten wir Ihnen geräumige Appartements und unser gepflegtes Hotel Rey Don Jaime. Und in der flachen Sandbucht ist gut baden.



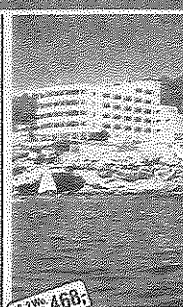
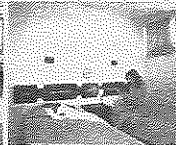
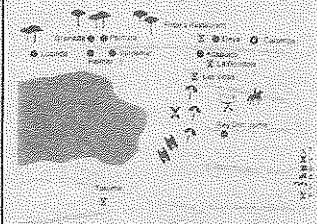
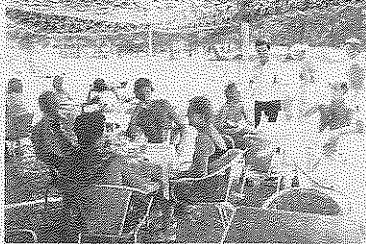
Stille Wälder, weiße Pinienhain eine geschützte, flache Sandbucht

Etwa 18 km von der Hauptstadt (regelm. Busverbindung, ca. 20 Pfr. fern), liegt das bekannte Santa Ponsa beliebter Ferienort mit strahlend Villen, modernen Appartements Pensionen und Hotels, gemütliche und Bars.

Die familiäre Atmosphäre, die flache Sandbucht (Sonnenschirme stühle), Sportmöglichkeiten (Tennis, Wasserski, Bootsverleih) und wunderschöne Umgebung (stille und Pinienhain mit herrlichen Wegen) locken immer mehr begl. Urlauber nach Santa Ponsa.

Bus-Transfer vom Flughafen Palma ca. 7 Stu

BAR: 1 Bier ca. DM 1,-	MIETWAGEN: ab ca. DM
MINIHOLF: ca. DM 5,-	TRETTBOOTE: 1 Stunde ca.
TENNIS: 1 Stunde ca. DM 5,-	SUNNENSCHIRME + LIH je ca. DM 1,-
REITEN: 1 Stunde ca. DM 6,-	



3.2 No. 4
Übern. ab 377,-
SPAS
PAKETS 327,-

APPARTEMENTS DEYA (NUR ÜBERNACHTUNG)

Ein modernes Appartement-Haus mit allem Drum- und Dran! Zentral gelegen und nur ca. 150 m vom Strand entfernt. Mit gepflegten Aufenthaltsräumen, Cafeteria, Bars, TV, Lifts. In der großen, reizvollen Außenanlage: ein eigenes kleines Dorfchen im kastilischen Stil. Hier finden Sie den Nightclub „Caramba“, Souvenir-shops,

groß; der Swimmingpool (33 m lang) mit Kinderbecken und Sonnenterrasse. (Strohsonnenschirme und Liegestühle). Ihr 2, 3 und 4 Pers.-Appartement; mit einem Schlafzimmer, einem kombinierten Wohn-/Schlafraum, kompletter Küche (mit Kühlschrank), Bad/Dusche, WC und Balkon.

3.2 No. 468;
Übern. ab 468,-
SPAS
PAKETS 408,-

STUDIOS LUCINDA (NUR ÜBERNACHTUNG)

Eine moderne Anlage am Ortsrand direkt mit Sonnenterrasse, Swimming-pool und becken. Im Hause: gepflegte Aufenthaltsräume, Speisesaal, TV, Lebensmittelgeschäft; Ihr gerichtetes 2- oder 3-Pers.-Studio; geräumig, K. (mit Kühlschrank), Bad/Dusche, WC und Balkonzimmer sind Studios zur alleinigen Benutzung. flache Strand von Santa Ponsa ist ca. 800 m

また殊にスペインの場合、過疎地方や、鉱工業等に就業する機会の乏しい地域にほとんどが、立地しているので、観光産業は、所得格差の緩和、地域振興にも貢献している。ただし、沿岸部に限られるが。

環境を改善し、従来のスペインのリゾート地のあり方に不満と不安を抱いて背を向ける、英仏独のそれに米日の観光客に、「新しいスペイン」を売り込むこと、これが国内の政治の経済社会の安定のためにも不可欠であった。社会労働党は政権を確保しつづけるためにも「新しいスペイン」を、観光面で実現しなくてはならない。前に見た『観光白書』の8項目こそその「新しいスペイン」の作成指針であった。

- 1) *OECD Tourism policy and international tourism in OECD Member countries*, OECD Paris 1992
89年 60.5%, 90年 59.5%, 実員では89年 328万5000人, 90年 309万6000人が車で入国している。
- 2) イベリア半島北西部にある、聖使徒大ヤコブの墓の在る記念聖堂の街、サンティアゴ・デ・コンポステーラへ礼拝のため、11・12世紀から巡礼者が、フランスから、ピレネー山脈をこえ、延々ぞくぞくとやって来ることとなった。この長い巡礼のルートには、特徴ある聖堂建築が並ぶ。今日でも7月中旬、この地で、さまざまな宗教的文化的行事がもようされ、世界中から人々があつまる。
- 3) Rob Davidson, *Tourism in Europe*. London 1992 178 p.
- 4) Rob Davidson. op. cit. p. 151
- 5) 『事典現代のフランス』ホテル状況の項目から。475頁
- 6) R. Davidson. op. cit. p. 151
- 7) 野々山, 前掲書 48頁
- 8) Manuel Valenzuela 'Spain: the phenomenon of mass tourism,' in *Tourism and Economic Development. Western European experiences*, London 1988. '91. p. 54

(V)

リゾートの新装と農村ツーリズムの振興

1989年、1990年に取られるべき行動や基準として、政府が自治州政府らと共につくりあげた政策は、3項目にまとめられる。

① 宿泊施設及びそれに関連する諸施設の近

代化・更新

- ② 農村観光の振興
- ③ 環境の重視

まず、①宿泊施設に関して。

自治州政府が、独自にもすすめていた、ホテル等の宿泊施設の近代化が、やはり課題ではあるが、それ以上にまず、④過剰な施設の制限、⑤登録されていない非合法の宿泊施設を掌握し、制度的基準に適合させることが述べられる。無届けで、観光客に提供されている宿泊施設が、増加しているからであった。これは近年のスペインへの外国人の不動産投資とも密接にからみあっている問題であった。

全体として、スペインには、公式には(政府によって確認されている)観光客向けのベッド数は、1985年までに169万7408床、そのうちホテル及びそれに類する施設が101万4022(59.7%)、キャンプ場で38万5378(22.7%)、届け出されているアパートメントが29万8008床(17.6%)であったが、この外に、かなりの無届けの観光客向けのベット数がある。研究によれば、推定だけでも、930万にもものぼるとのことである。¹⁾これには、個人等の別荘(second homes)を含めて、賃貸用のアパートメントや別荘(Villa)が考えられている。こうした、個人所有の居住、宿泊施設が、シーズンには観光客に提供され、他のoff-seasonには、所有者が、利用するのである。別荘を財産として、特にリゾート地に所有することは、勿論スペインでも「すべての社会階層」の渴望であって、所得がふえるにつれて、この別荘所有もふえてゆき、これが観光客に「賃貸」されるという訳なのだ。問題は、「観光客への別荘の賃貸が、届出されている宿泊諸施設と、かなりの「不正な」競合いをする」ことである。

これに加えて、低地価、¹⁾(勿論自国と比較して)にひかれての、外国人の不動産投資があげられる。スペインの海浜地域には百万以上もの外国人所有の住居(dwelings)があり、1986年だけで外国人による不動産投資は、1950億ペセタ、このうち80%が観光客によるものだという。

1年に約5万戸が外国人によって購入され、海浜地域ではもっぱら外国人による、個人貯蓄からの住宅取得投資、はじめは（夏季の）季節的利用（seasonal use）だが、最終的には退職後の隠居所となるのである。こうした外国人による住居所有は、1970年代に、コスタ・ダル・ソル（アンダルシア）、コスタ・ブランカで始まったとされるが、それから15年余もたつと、与える影響力はかなりのものとなる。「場所によっては、永続的な外国人居住者は、より僅かな地元の居住者向けにかんがえられていた自治体サービス供給力を超えんばかりとなっている²⁾」。外国人といっても、この地で住みたいとするのは、もっともよくこの地を訪れる国々の人々であるのは当然、住居取得者の30%はイギリス人、25%がドイツ人である。この外国人たちが、自分の利用しない期間にレンタルに出すとすれば、「市場」に波及するところ大なのは、理解しやすいことである。

これに、尚加えて、新しい外国人による「leasing back」あるいは「time-sharing」という形での住居利用も考え出されてきた。日本でも、近年よく安上りの「別荘」所有(?)として、観光・不動産資本によって大々的にすすめられてきた、会員制リゾート・ホテルのたぐいである。豊かな国々の、少額だが大量の諸資本(?)を集めて設けられる、この種の宿泊施設は、スペインの土着観光・不動産資本にとって大きな攪乱要因であり、手強い競合い相手であろう。

スペインは、まず従来型のマス・トゥーリズム、大量観光者受け入れ政策を転換し、良質の観光客を適正量受け入れようとするとしても、自らの手の及ばない外国人所有の住居が、大量に実質「賃貸」される事態の、実態調査からはじめねばならない。資本の自由化に乗りだし、EC加盟により更に一層規制緩和をはからねばならないスペインは、外国人、とりわけイギリス人、ドイツ人の投資を受け入れざるをえないのだが、このことは、ますますスペインの「黄金の卵」と言うべき観光・宿泊・サービス業を統御不可能なものとしてゆくおそれなしとしない。宿泊施設のサプライを制限しようにも、

外国人所有の別荘・アパートそれに会員制リゾート・ホテルが、スペイン外の旅行者や観光業者によって組織されて、安上りにすごしたいとするイギリス人、ドイツ人に効率的に提供されるとすれば、何の打つ手があるかと言わざるをえない。

外国人所有の宿泊施設については、これで止めるとして、中央政府が自治州政府と共に改善につとめようとするのは、ホテル等の近代化であった。現在のホテルの質を点検し、基準をクリアしていない場合には、これを順守させようとする政策であり、双方が補助金を支出し、近代化をうながそうとするのである。「ホテルの新設備（new installations）、拡張、近代化はすべて補助される。新設ホテル、観光客向けのキャンピング地、個々の事業者による余暇活動の補足的施設の建設等には支援が与えられる³⁾」というのである。しかし、これには重大な条件が課せられる。補助金、支援が与えられるのは、国民所得が低く、失業率も高い地域・州であって、「飽和状態となっている地域やアパートメントそれにレストラン等」は排除されるというのである。「過剰施設」の切りすてと言えようか。

排除される対象となるのは、過密なりゾート地、'60～'70年代を通じてスペインの観光収入を稼いできたマス・トゥーリズムの中心地となるのであろうが、この地域こそ最も更新改善を必要と感じている地域であろう。とすれば、この選別的な政策には、当然の反撥、批判が浴びせられる。それは、最後のところでみることとして、次いで、新政策、新指針の要とも言うべき「農村観光」を取りあげることとしたい。

② 農村観光 (Rural tourism) の振興

「スペインの観光商品 (tourist product) の多様化政策のなかで、農村観光は、観光局の側から、第一義的関心をうけている。

自治体は、農村観光地域に宿泊施設をつくりだすよう、さまざまなタイプの財政援助を作りだしており、農村観光の特徴を決定する諸規制をも考えている」他、農業観光 (Agrotourism) には、農業・漁業・食糧省も経済援助を提供し

ていると、スペイン政府は、農村観光振興に積極的に乗り出そうとしている。⁴⁾

では農村観光とは何なのか、又どんな個別の施策でその振興が可能だと考えられているのであろうか。

まず結論を先取りして言ってしまうと、まだまだ構想中であって、具体策は進んでいないのが実情である。

1991年3月21・22日、観光局の音頭取りで17の自治州の観光業の責任者、環境局、農業構造局、それに民間部門の関係者を集めて、「国際農業観光セミナー」が開催された。そのセミナーでの結論として、観光局は「スペインの農村観光の発展のための規制枠を設ける土台として役立つ立法の比較検討の研究を遂行することに同意した」と言うのである。「訓練の分野では、国民のレベルでの必要、要求の知識を得、スペインの様々な地域に容易に適用しうるプログラムを提供する研究がなされることとなる。⁵⁾

農村観光について、「国民的国際的レベルで必要な情報のチャンネルを強化すること、これによってこの事柄での効果的な協力を可能とする」ことが最終的に目論まれている、あるいは、農村地域における情報化のための先進的技術の導入に、観光局は特に関心を注いでいるという、具体性を欠く項目が列挙されるのみであった。

観光局は、農村観光に関して自治体への援助をひろげる課題を遂行し、もつぱら、個々の自治州、自治体からの農村観光について提出される計画(Projects)の適合性、成長可能性に関して中央レベルで、中央政府からの援助を実施する組織体に、その知識を伝えると、自治体のイニシアティブに依拠する姿勢に終始するのである。もっとも、ただ一つ言及されている具体例は、④「サンチャゴの道(El Camino de Santiago)」(サンチャゴへの巡礼の道)、⑤「銀の道(La Ruta de la Plata)」(The Silver trail)といった特別な商品(specific products)である。これらは、非常に農村環境によって影響を受けているから、特にこの歴史街道をプロモートすることが課題だとされるのである。

前者はスペイン・北西部の地、ガリシア地方

の「地の果て、フィンステルレ」と呼ばれる、大西洋の岬にまでは行かないまでもユーラシア大陸もあと僅かの地点にあるサンチャゴ・デ・コンポステーラ、スペインの守護聖人であるサンチャゴ(聖ヤコブ)の墓のあるカテドラルまでピレネー山脈を越え、ヨーロッパの信者たちが、9世紀半ばからはるばると巡礼の旅をつづけてきた巡礼の道である。文化と宗教、伝統の道である。スペインに永く滞在した堀田善衛によれば、「このヨーロッパの地の果てに位置するサンティアゴ・デコンポステーラは、ローマ、イエルサレムとともに、かつてのキリスト教徒にとっての三大聖地の一つであり、この地への巡礼に歩いて往復をする人々は、最盛期の十二・十三世紀頃には、正確な統計などはもちろんありはしないのであるが、年に80万人から100万人を越えたものであったという。⁶⁾

今日、自動車、バス、飛行機、それに船といった、化石燃料に助けられてスペインとの国境にたどりつく人々の数は1990年で5204万4056人⁷⁾と対比すれば、人数では僅か1/50にしかならないが、ほぼすべてが二本の足ではるばる地の果てにまで100万人が旅をするというのは、驚嘆そのものである。巡礼がたどった途、旅の途中加護を祈った巡礼路上の教会等の諸建築、それは確かにスペインの Tourism の、永い永い伝統を体現するものであり、特別にプロモートすべきものであるだろう。

しかし、これだけでは、我々スペインの史実・古実に詳かでないものには、何故農村環境が影響を与えていると言えるのか、知りたいものである。「銀の道」も同様である。

スペインの観光白書では、これ以上の言及はないので、一体全体スペインでは農村観光という時、どのようなイメージを思いつかべているのかを、研究書等から探してみることにしよう。

農村観光を考える際に、重要なことは、これが観光商品の多様化という観点からみることである。スペインの売物は、何より太陽、陽光の下での海浜、砂浜であり、これらをエンジョイするためのホテル・キャンプ場等の施設であった。イタリア・フランスの地中海沿岸諸国とく

らべて、物価も安く、低廉な価格で旅行業者にバック・ツアーの企画を組ませることができた。スペインは、地中海沿岸諸国のなかでお値打だったのである。しかし、この低価格と手つかずの（未開発の）自然、魅力的な混みあわないビーチは、人々が60's, 70'sと引きつづきおしよせ、その収容に国家、自治体、民間資本、それにドイツを主とした不動産・観光資本が努めるなかで破壊されてゆく。地価も食糧品等生活用品も高騰し、加えてスペイン通貨も引き上げられて、スペインの魅力の一つは80's年後半になって落ちこんでゆく。年間500万人も収容するほどにふくれあがった各種の宿泊施設（ホテルから闇の別荘賃貸まで）が作りだす建造物の乱立、林立状態と、排出される生活雑廃水、下水による汚染、人々の集中が作りだすカオス状態は、環境、景観の面からスペインを人々の選択からはずさせてゆく。

加えて、まずギリシア、ユーゴスラヴィアが、次いでトルコ、チュニジアなどの、地中海に面する世界の国々が、かつての、50~60'sのスペインのように、安く、未開発の自然景観を売り物に観光産業の市場に登場する。環境と値段を考えれば、スペインを選ぶのが、不思議とさえ言えるようになってきている。

こうした状況のなかで、スペインは、太陽を売物とするだけの、マス・トゥーリズムの国々のなかでも、魅力の無い国に転落していったのであった。研究者 manuel Valenzuela は、次のように指摘している。

「少数のリゾートへ観光客が集中することで、環境、景観に、又同様にこの地域の生活の質（交通、個人サービス等は）に、重大な悪影響が及ぼされた。それにあまりに安い休暇パッケージ価格は、自然環境と人間が作りだした環境に圧力をかけることとなった。⁸⁾」

もはや海浜リゾートでの休暇という単一商品の提供では、スペインの観光産業の将来は危ういものでしかない。そこから「多様化」が打ち出されたのである。

そのように考えてくれば「農村観光」が抽象性を帯びざるをえないのも理解できる。言わば、

農村観光は「多様化」のなかの一案にすぎないのである。スペインの中央政府の観光局、自治州政府の観光担当部門の人々が、レジャー施設に補助金を出すとして、対象に、ゴルフ・コースの造成、マリーナの建設をあげているが、これは、エリート層、中産階級をスペインによぶために、高額商品を企画するという、これまた「多様化」の一環なのである。7月、8月、9月に44.7%の外国人観光客が集中し、バレアリス、カナリア諸島に55.5%が、カタルニア州を加えれば70%強が地中海沿岸に集中する⁹⁾、これを「多様化」するために、ピレネー山脈の麓にスキー場を次々と開設し、冬季観光に試みるのも、又そうなのである。

「農村観光」は、①まず過度利用のため劣化が進んだ海浜地域から、内陸部に観光客を散らし、合わせて② 過疎化が進行している内陸農村地域に所得と雇用の途をつける ③更に「農村の家屋や小村に人々が再定住したり、新しい、住居用諸施設の建造の機会となったりする¹⁰⁾」ためであった。したがって、農村観光は、沿岸地域の環境負荷を軽減するという点では、「環境を意識するもの」ではあっても、いわゆる Soft Tourism、環境にやさしい観光を実践するといった目標を持って考えだされたものではないと言えよう。

農村観光を説明する章で、スペインのこうした新政策を紹介してタヴィドスは、この新政策は、決して新しいものではなく、80'sのイタリアが、「安い大衆観光の海浜リゾートの集合体から、イタリアの芸術・文化と田舎での値の張る休暇で人々が訪れる、もっぱら上級市場 (up market) の目的地へと、変身していった」例に倣おうとするものだと言っている。それだけでなく、スペインは、1920年代、又1960年代にパラドール（古城や修道院跡などの施設を改造した国営ホテル）をつくっていった過去をもっているのだから、これをふたたび取り上げたことになるのだとも指摘している¹¹⁾。

彼によれば、農村観光としてスペインの諸地域で、自治州政府などが推進しようとしている企画は、バレアレス諸島のそれが典型的である。

バレアレス諸島の州政府は農家での宿泊計画を打ち出している。

この計画については、スペインの新政策への批判をとりあげるなかで紹介することとして、いそぎ、第三の、環境面での配置をみてることにしよう。

環境の重視

環境保護の一般的な枠としては、1989年3月27日布告の「自然空間及び野性動植物保全法」が定めていて、そこでは10ヶ所の国立公園の創設とそのなかにスペインの全土地面積の10%になる自然公園も考えられている。この外、1985年8月制定の水に関する法、1988年7月26日制定の海岸線法、それに布告7381号(1988年7月1日付)は海水浴場の水質に関する規定を告げている。

観光局は、観光と環境が相互に関連しあうものであることを関係部門に意識させ、特に光をあてねばならない諸活動を、次のように挙げている。すなわち、

——関連諸部門が観光と環境の関係について意識させる手段として、セミナーや情報の組織化につとめる——

——公的助成の下にある新投資計画には、環境諸条件の技術的ファイルを求める——

——記録、分析、調査の収集——

——セミナーや、国際諸組織への参加、とくに世界観光組織(World Tourism Organisation (WTO))の環境委員会への参加——

——環境局との協力——

——観光局によって開発される諸政策にかかわる環境の諸要因を考慮し、とくに提出する観光商品の多様化と非季節的な(季節に拘わらない)品質に配慮し、又代替的商品(alternative products)の創造に努める——

と、あまり新しいとも今日では思えない論点が列挙される。¹²⁾環境アセスメントが、公的支出部分を含む計画では求められるというのは、かなり進んだ姿勢とは言えるだろう。

新政策は、この外、評判の悪い、ホテル従業員のサービス・マナーの改善のために、訓練

機関を設け、それに専門学校・大学の観光に関する専門講座を設ける等を述べているが、それらは割愛することとする。そして最後に、新政策のなかの要の要とも言うべき、農村観光、rural tourism に対する賛否の論点をみてることにしよう。前にふれたR. タヴィドソンの著作を利用して進めることとする。

農村観光は環境に優しいか?

以上にみてきたように、スペイン政府は、従来のマス・ツーリズムにのみたよるのではなくて、多種多様な観光のあり方を展開して、観光収入を維持しようと政策を作成してきた。この政策は、しかし、中央政府によってというよりは、むしろ自治州政府からの突きあげと発意によって、その提案でできあがったものであった。とりわけ、観光産業の中で最大の役割を担うホテル等宿泊諸施設の改善、更新そして整理という「リストラクチュア」の方針、それに新たな「Sun, Sand and Sea」の seaside tourism に代る、農村観光の推進の提案は、マス・ツーリズムの退潮をいちはやく感じざるをえなかった地域から出たものであった。外国人観光客の36%を受け入れる、観光用島と言われるべき、バレアレス諸島政府からである。

R. タヴィドソンが、バレアレス諸島政府の政策方針を報道した記事を取録しているので、まずそれをかいつまんで紹介することとしよう。

「バレアリスは緑となろうとしている Balearics are going Green」という見出しで州政府の方針をまとめた、TTG Europa 紙(1991年4月21日)は、マヨルカ島が観光客に数年先には「もっと清潔で、緑で、静かで、もっと快適、豪華な環境を提供しようと望んでいる」と、始める。200億ペセタをインフラストラクチュアの改善のために投入して、宿泊施設から海浜、舗道から警察、情報サービスから交通整理までを改善しようというのだが、そのうちの60%、120億ペセタは観光客及び住民のアメニティの増進のためである。

何が挙げられるのか、何に支出されるのかと、期待すると、これが大いに裏切られる。ごみ処

理、街灯、道路修理、海浜、公園の維持管理 (Waste disposal, street lighting, road repairs and beach and leisure park maintenance) がそれであって、こうしたことだけで、公共予算は'90年には373%、'91年には500%の増加をみるることとなる。(基本的なと言ふべき項目に、予算がほとんど投入されてこなかったとみるべきなのか。)

州政府がこうした「改善事業」に、60%を、市町村自治体が40%を負担して進めることで民間部門の側でも対応した努力が始まることを、州政府観光局は望むとするのだが、特にホテル業に関係する「要望」はかなり、激烈なものである。緑でかこまれた、アメニティに富む、一定の質的水準に達した宿泊施設となるためには、多くの古いホテルの閉鎖と新設施設への規制強化が求められる。なぜなら「これまで、ホテルや短期滞在施設 (self-catering accommodation) への需要は、終りがないように成長を続けてきたが、開発業者 (developers) は建てられるところではどこでもただもう建てつづけてきたので、環境にはほとんど意を払ってこなかった¹³⁾」からであった。'84年に建築基準が制定されてから、ホテル建築にあたっては、部屋毎に一定の敷地 (庭園) 面積を定めることとなり、はじめは30㎡が、'91年には130㎡がないと、つまり200室のホテルでは26,000㎡の敷地を持たないと許可がおりなくなった。同時にホテルのグレード・アップも目的となる。新築には5星あるいは4星級でないといふローンはみとめられなくなった。勤労者中心の大量観光、つめこみのバック旅行者客相手ではなく、前にみたようにエリート、中産階級をターゲットにした中・高級ホテルを建ててゆこう、高等リゾート地へとソフト・アップしようという戦略の実施である。

乱立・林立したホテル群のなかに、高級ホテルが広大な敷地を持って建つわけではない。当然淘汰が、整理が必要となる筈である。

観光局の発言はこうなる。「目標を達成するには、この地域で約5万床をなくさなくてはならない、そしていくつかの古いホテルは、もうすでに、とくに中心地では、閉鎖されている。こ

れらは、事務所や民間アパートに変えられている。多くの三星級のホテルは、とくに、住居や高齢者用住宅あるいは病院に、転換されるべきである。築後20年以上のホテルは用途変更をするか、更新されるべきである。¹⁴⁾」

しかし、こうした政策、指針は、もうすでに出来上ってしまっている、マス・ツーリズムに対応したインフラストラクチャーを大きく変える (それも短期に) ことにはなりそうもない。なぜなら、1989年現在で、バレアレス諸島には、ホテルが77、短期滞在用アパートが622、観光客用アパートが29000棟がある。マヨルカ島だけで25万床があり、その70%がホテルで占めているのだから。5万床を、仮りにマヨルカ島ですべて減らすとしても、20万床に減るだけでしかない。いわんや、既存の、ホテル等宿泊施設を、事務所、高齢者住居に転換するというだけであるなら、乱立、林立して観光環境、景観を破壊している建築物群は残りつづけるのであるから、この政策が望むような、高級感にみちた、エリート層を魅了してひきつけるリゾート地に変身しうる筈がないということになる。

事実、この新政策と、バレアレス諸島政府がすすめている事業には、ホテル業界からの批判の声があがっている。R. タヴィドソンはその一つを収録しているのだから、これもみることとする。この声は、スペインを代表するホテル業界の重鎮、ピエール・トウルポーのものであるが、新政策は既存の伝統的海岸休暇を犠牲にしているという批判であった。

彼の主張はこうだ。「太陽と海浜のツーリズム (Sol y playa tourism)」は死んだというのは馬鹿げている。観光客の85%は、それを望んでいる、他のものもほしがっているが、別のものを欲している訳ではない。もっと多くを望んでいるのだ。「もっと良質な商品を観光客は求めているのだから、ホテル業界は今行動し施設を更新しなくてはならないのだ。」中産・中間階層の観光客を魅きつけようというのは結構だ。しかしスペインの海岸にある60万床を満たすほどにそんな階層の客はいるものだろうか。

彼の舌鋒は政府に鋭く向けられる。

ホテル業界は、危機を意識していて政府からの援助を望んできたのだが、政府は EC からの補助金をホテル業界にふりむけようとはしてこなかった。彼らは未来の観光というものに——農村観光、文化観光といった——関心を払ってきて、海浜を忘れていた。それだけではない。彼ら、観光局はだめになったホテル業者を助けるつもりはないという。

「別の言葉でいえば、危機はすべて我々の誤りのため、強くなったペセタや海のひどい状態のためではないというのだ。当局は、1970年代我々がすべて観光客をスペインへ運びこんだとは言わない。我々のホテルは更新しなくてはならないし、サービスも改善しなくてはならない、それはそうだが、我々が20年もの間スペインのために富を創りあげてきたのだ。今、政府は我々を助けるべきではないのだろうか」という批判である。ホテルの整理は仲々難しいと予測される。

さて本題の農村観光 (rural tourism) へ戻るとしよう。前にもふれたように、農村観光を新政策にとりあげたのには、地域間格差の解消、過密と過疎の問題の緩和という視点からであった。勿論、海浜の過度利用の軽減の視点もあった。急激に成長政策がすすめられる場合、これら歪み、ひずみは激化こそすれ、解消することはない。スペインも同様であった。そこから、妙薬として農村観光がとりあげられることとなるのは理解できる。

しかし、農村観光は、妙薬、パナセナとなりうるものなのだろうか、この点に、批判の声があがる。今度は、資本の側からではなくて、地域、環境の側からである。

バレアリス諸島州政府観光局は、ホテル業のリストラにだけ賭けているのではなかった。農村観光の提唱にも踏みだしていたのである。新聞の報道を引いてみることにしよう。

「地方の農園を観光産業に引き入れることを目指してバレアリス政府は農園宿泊計画を発足させてきている。いわゆる農業観光 (Agrotourism) は観光客にバレアリス諸島の農村生活の本当の味をあげあわせることを考えたもので、

太陽、砂そして海 (Sun, Sand and Sea) がすべてだと一般にこの地域はうけとられているが、それに代わるものを提供するものだ。¹⁵⁾」

バレアリス諸島推進局長は、観光客はいままで諸島の大部分を成している、美しい田園をみてこなかった。このプランは汚されていない環境のなかで緑の休暇 (Green holiday) を楽しんでもらい、又地方の農村自治体をたすけてもらうこととなるだろうと、希望をのべている。州観光局は、このバレアリス諸島の農村観光が旅行業者の宣伝パンフレットに載って、「最低でも7,000人の新しい観光客がこの計画の成果としてやってくる」ことを期待するのである。

前にみた5万床の削減という、計画上の大ナタと比べれば、7,000人の新規農村観光客の期待は、いささか謙虚にすぎるといえるものではあるが、この農村観光に参加する農園は、最大で6床しか提供できず、観光客が滞在している間も農業はつづけるというのであるから、この数でも過大かも知れない。農村、農園観光のインフラ整備にどれほど EC からの補助金が投入されることとなるのか、参加する農家にはどんな要求と援助が与えられるのかについて記事はつたえてくれていない。

多様化の一環として掲げられることとなった、この農村観光への当局からの熱い期待はわかるものの、この政策がかったの沿岸のリゾート開発の苦い教訓をふまえたものかどうかについては懸念の声があがっている。

グヴィドソンは、英国の日刊紙「オブザーヴァー The Observer」に掲載された、英国の旅行ライター、アリソン・ライス (Alison Rice) の批判を引いて、この政策は、もうすでに傷つけられ、スペインの自然に、今一つ打撃を加えるものにならないかとしている。ライス女史の批判はかなりシニカルであった。彼女によれば、もし既存のリゾート地が、大量の観光客、交通そして下水をうまく処理するようなインフラストラクチャーをそなえたのなら、もうそこではそれ以上の環境汚染はない筈、それにもう環境、動植物の生息地 (habitat) は傷つけられようがない、何故なら、そこはもう破壊され尽してい

るのだから。だがしかし、内陸や未開発の海浜ではどうか、開発すればどうなるのか。スペインの哺乳動物のおおよそ53%が、脅威の下にあるとされている。スペインの最初の国立公園で、ヨーロッパの最重要な野性動物のサンクチュアリである、コタ・ドニャーナ (Cota Donana) は、以前は灌漑のために、最近では観光開発のために、水をぬかれて、死滅の危機にあるだけでなく、殺虫剤、肥料のために、最近では余暇の諸活動のために汚染されつづけている。他の国立公園も同様だ。よく知られるようになればなるほど、脅威にさらされることとなる。彼女はこのようにスペインの環境、特に自然環境の危機を指摘し、最後にスペインの環境保護、エコロジ・グループであるアデナ (Adena) の新政策批判でしめくくっている。

アデナの批判は、新政策は(観光によってしよわされることとなった環境破壊の)お荷物をスペイン中にまきあげようというもので、以前と同じわなにつき進んでいるというのであった。

この批判が挙げられるのは、スペインの自治州や中央政府が、スペインの地方、農村のアメニティ向上に充分投資してこなかった事実があるからであろう。農村部の過疎化を喰い止めるためと言いながら、観光客が、もし期待通りに集められてきた場合に充分なインフラを整備しないとすれば、またまだやっていないとしたら、沿岸部と同じ破目になるのは当然であろう。

それに農村観光の担い手たるべき農民や農村は、どういった実情であるのかが、まず問われねばならないだろう。工業化が急速に進み、農村部から働き手が吸いあげられていったばかりでなく、スペインの最大の産業である観光業にも人手を取られて、農村は過疎問題と人手不足に悩んでいる筈だからである。そして農村部のアメニティはどうかである。

- 1) Manuel Valenzuela, op. cit. p. 47
- 2) Valenzuela, op. cit. p. 48
- 3) *Tourism Policy*……, 1992 p. 120
- 4) *Tourism Policy*……, 1992 p. 117
- 5) *Tourism Policy*……, 1992 p. 118
- 6) 堀田善衛, 『情熱の行方——スペインに在りて』

- 1992年 岩波新書 p. 48
- 7) *Tourism Policy*……, 1992 p. 289
- 8) Valenzuela, op. cit. p. 59
- 9) R. Davidson, op. cit. p. 151
- 10) Valenzuela, op. cit. p. 57
- 11) R. Davidson, op. cit. p. 153
- 12) *Tourism Policy*……, 1992 p. 118
- 13) Davidson, op. cit. p. 152
- 14) Davidson, op. cit. p. 152
- 15) TTG, Europa, 25 April 1991. R. Davidson p. 153から引用

(VI)

農村は観光業を担い得るのか

1960年、産業別就業人口比率では農業は41.7%、それから30年たった1990年12.6%、1/3以下にまで減少した。日本でも高度成長の過程で農村からの人口流出が、いわゆる「過疎と過密」といった社会問題をうみだすまでに激化した。

しかし、スペインと日本の大きな違いは、工業人口の割合は、'70年代に増加(28%)したが、'60年24.7%、'90年23.9%と、就業人口比率の変化はなく、大巾に増加をみたのが、サービス業で26.7%から54.1%へと倍増していることである。勿論、直接、間接に、観光産業と、関連する飲食業に従事する労働者は100万人以上とされているから、このサービス業の拡大に大きく貢献しているに違いない。

農業人口の減少分が、サービス業、それに出稼ぎ労働者、失業者の増加分を構成する。

観光と農業・農村との関連で、農村を考えるとすると、農業就業人口一般という大枠では全く不十分である。土地、風土、所得、土地の所有関係といった具体的な条件で農村をみてゆく必要がある。

スペインの自然は、増田義郎氏によれば、「大きな国、高い国、太陽の国、地域差に富む国」と特徴づけられ、更に4つの地域に分類される。① 湿ったスペイン、② 大陸性気候の乾いた中央部(メセタ)、③ 地中海性気候の沿岸地帯④ 常春のカナリア諸島(大西洋上)である。¹⁾

西欧ではフランスに次ぐ面積(50万4782km²)を持ち(日本の1.33倍)、平均高度ではスイスに次ぐ高地が大半の国土で、首都マドリードは海

抜646m, ヨーロッパ第一の高原都市, 中央部はメセタとよばれる台地である。この大地はほぼ年間3000時間の日照を得ている, が, 4つの気候区に区分されるほどに地域差が激しい。下図にみるように, 地域差は, 農産物の相違となる。

スペインを代表する農産物はブドウ(ワイン), オレンジ, レモンの柑橘類それにオリーブらの地中海性気候の地に育つ作物であるが, 小麦・大麦それに生活の高級化にともなって食肉の習慣がひろがり, トウモロコシも大々的に栽培されるようになった。EC加盟後も競争力を持つとされる作物は, ECの生産量に占める割合が22%の野菜, 果実(除柑橘類)が20%, 柑橘類が45%, ワインが17%である。この競争力のある作物は, 労働集約的であることに注意しなくてはならない。

大麦, 小麦, オリーブなどは粗放の農法で可能だが, オータルキー・農産物自給の時代が去った今, ECの内での競争力は問題である。

① 湿ったスペインは, 大西洋気候帯のガリ

シアからピレネーの南山麓を経て, アラゴン・カタルニアに至る地帯で, 北西部のリンゴから, ブドウ(ワイン), 小麦, オレンジ, それに水田で米作が行われる地域である。

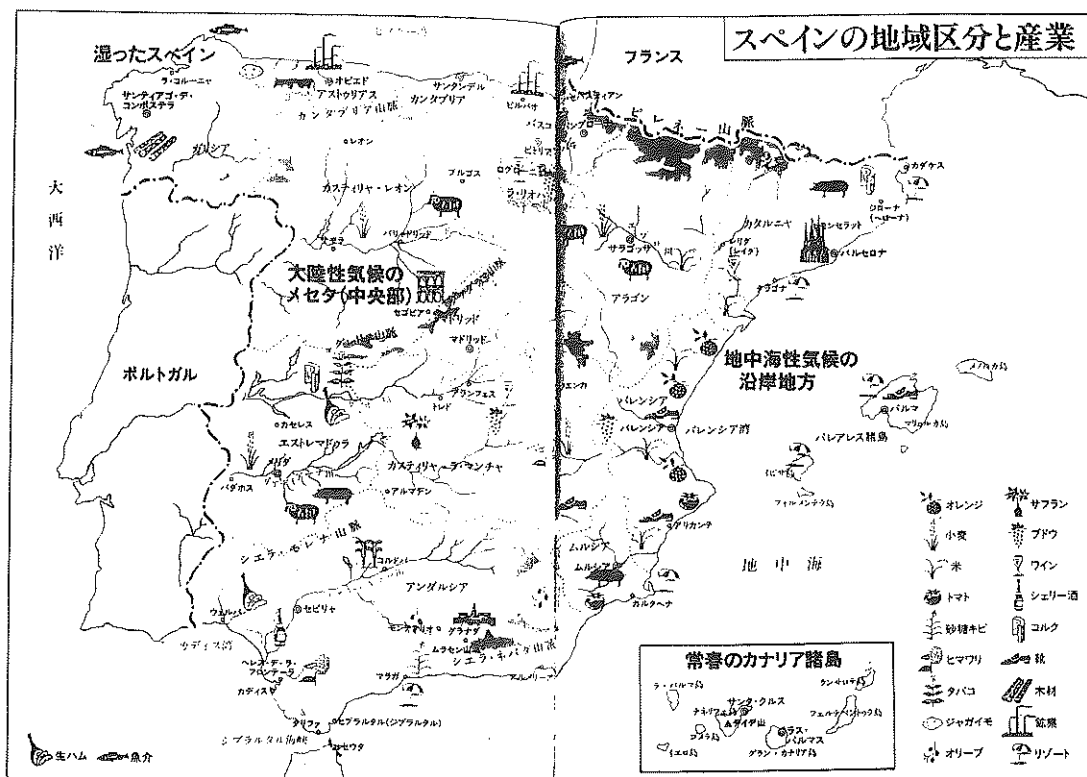
② 大陸性気候のメセタの中央部は, 夏暑く, 冬は冷たく, 平均雨量は少なく, 大土地所有(ラティファンディア)で, 小麦, 牧羊など粗放的農業の土地である。

③ 地中海性気候の沿岸部は, スペイン全土の1/3以上を占め, 冬暖かで太陽がいっぱい, リゾート地として開発されているが, 南へ下るにつれて砂漠状化する。水が問題であり, 暑さもひどくなる。バレアレス諸島はここに属する。

④ 常春の大西洋上のカナリア諸島は, 近年観光リゾート地として開発されてきているが, 森林は少なく, やはり水が問題である。

以上の四地域に, 各地方の所得水準をかきいれると, 図4となる。

中央台地上の諸州は最低の所得水準だが, ここは大土地所有が支配的で, 過疎地帯でもある。



貴族地主の社会的支配力は尚つよく、土地の合理的利用をこぼんでいる。²⁾ 地中海性気候帯に属するとは言ってもアフリカに近くなれば、農業それに観光の条件にめぐまれず、所得が低いのがよく解る。このアンダルシア、ムルシアでは、灌漑等の事業が進んでいるところだと、若干上昇する。(とは言え、ロシオ国立公園の破壊が、周辺地域の用水収奪雑廃水の放出、農薬・肥料の流入ですすむというマイナスを伴う。)

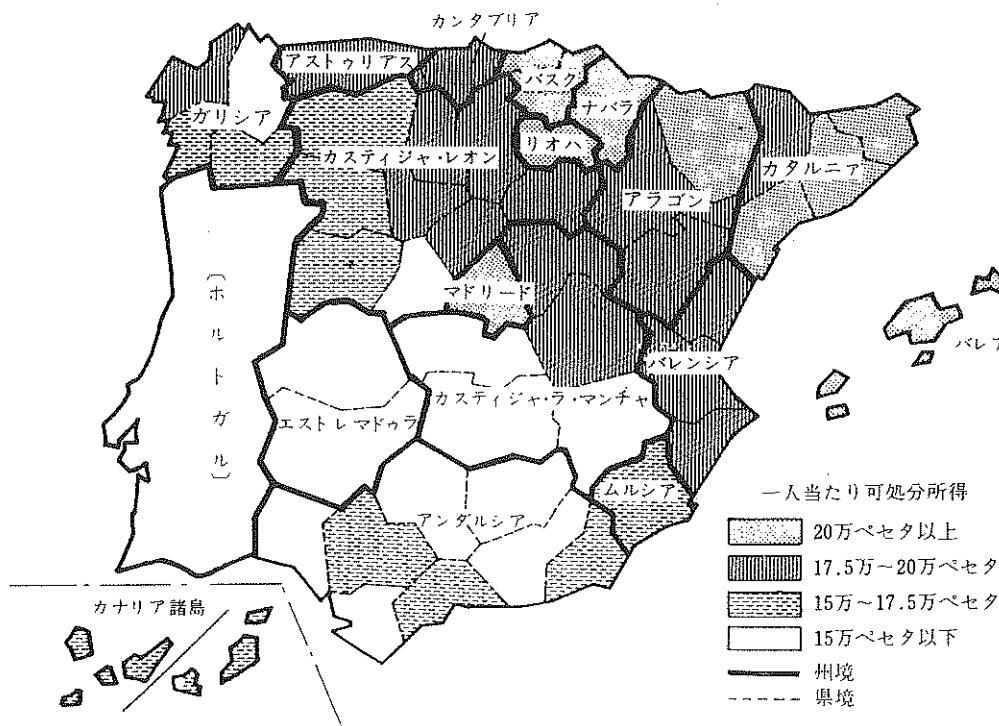
さて観光と農村の関連に戻ることにしよう。観光リゾート、農村観光という観点から考えれば、大土地所有が支配する、貧しい農村地域は、巨額な(モトもとれない)資本を大量に投入するのならともかく、存在する農村と農家を利用するとすれば、不適格と言わねばならないだろう。アンダルシアを旅したイギリスの旅行作家は、1979年改版の著書『スペイン』で、下記のように報告している。

「近代の影響が南部にも少しずつ入ってきて

いるため、もはや最悪の事態からは脱却している。海岸に沿って点々と作られた観光客用の光り輝く地域は、まさに変化と成功のシンボルだといえる。だが旧来の貧困から抜け出したばかりの国だから、まだみじめな場所も残っている。アンダルシアの田舎の人々が、上水道、水洗便所、屋内電気、トラクターなどを知ようになったのは、ほんのここ2・30年のことだ。村の道の多くはいまだに舗装されていないため、夏は埃だらけだし、雨が降るとぬかるんで通れない。何千戸もの村々の家々では、人間がニワトリ、ヤギ、ブタなど同居している。子どもたちの健康状態はいまではずっとよくなったが、親の世代に貧しかった影響がいたるところに見られる。女性は年令より老けてみえ、男性には奇型とか盲目、痴呆的な状況が目立つ。³⁾

さんざんな言われ様と、同情したくなる程であるが、こうした評価を下すほどの有様であれば、要求度の高いドイツ・イギリスのトゥーリ

図4 スペイン各地方とその一人当たり所得水準：1977年



出典：Banco de Bilbao (1977)
『現代スペイン経済』から

ストを受け入れることは困難であろう。

道路等のインフラの不十分なところ、家畜との雑居だけでなく、家屋そのものも大問題である。彼の酷評は尚つづく。

「このように貧しさがはびこっているため、いったいこれがヨーロッパなのだろうか、と目をこすってまばたきしなければならぬようなことに出くわす。たとえば、アンダルシアの穴居居住はかなり住みやすくなっているが、動物が住む穴とさして変わらないような場合もある。(中略)なかでも自然のままの姿を残しているのは、アンダルシアのあちこちで見られる奇妙な草葺の小屋である。家というより干し草の山と言ったほうがふさわしく、アフリカ南部の草原にある小屋に似ている。小屋が二つ横に並んでおり、一つは生活の場でもう一つは寝室用だった。これほど単純素朴で、われわれの新石器時代の祖先の生活に似ているところはほかにはない。⁴⁾」

よほどの覚悟の出来たツーリストでないと、こうした環境のなかで *Vacance* を過す気になれないであろう。送出国とほぼ同等といった居住、生活水準の環境でないと、ツーリストを送りこめないことを、まず熟知しているのは、先進国のツアーオペレーター、旅行業者である。彼らは、アジア、アフリカ、ポリネシアといった風土、習慣が異なる土地を開発するとき(見えないところで手を抜き、環境破壊を進めるとしても)、観光客の母国の居住要件の水準をクリアーする宿泊施設を建設する。彼らのメガネにあわない水準しか提供しえない土地は忌避されるのである。

だから、農村観光と言っても、あっせん、紹介の手間も拒否されるような条件の土地では、大よそ観光事業も成り立ちえない。とすれば、スペインの農村で *rural tourism* が、もし成立するとすれば、それは高所得で、土地利用が個々の農家の手にゆだねられている地域でなくてはならない。この条件にあうのはスペイン北部でしかない。

事実、州政府、地方自治体から *rural tourism* の方針にうちだしてきたのは、アラゴン、カタ

ロニア、カステイラーレオン、アストゥリスといった地域であった。⁵⁾ いずれも、湿ったスペイン、17.5万ペセタ以上の可処分所得を得ている(1977年)地域に属している。

では、こうした地域で農村観光の条件は成立しうるのだろうか。制約条件はないのだろうか。それを考えてみることにしよう。

まず第一に検討しなくてはならないのは、これら地域の土地所有、経営の条件である。

この地域は、ミニフンディアと呼ばれる零細土地所有が支配的である。スペインの農家当り平均が12~13hrだが、1~5 hr層が38.4%、5~10hr、を加えると50.8%と言うのだから、北部では更にこれより土地は狭いことになろう。集約的農業でなければやってゆけないであろうし、これには規模の小さな家畜飼育の労働が加わる。農家はどんな条件下にあるのかを、1つの例からかいまみてみよう。

1987年 EC 加盟直前のスペイン農村を訪れた重富健一教授の報告から判断すると、困難であるようである。

カタルニアより少し南に位置する、やはり柑橘類、野菜等の地中海性気候型の作物を栽培するバレンシア地域の農家、M農家の経営面積は2ヘクタール、野菜とオレンジとジャガイモが主軸、40代の夫妻と80代の老母それに娘2人の5人世帯、家族労働である。労働時間は年間4500時間、「忙しくて、おちおち休みもとれない」、が所得は少なく、平均的労働者の時給の2/3、熟練労働者の1/2、「農業はオラ一代でけっこう」とのことである。

同じくバレンシアの酪農経営でも聞こえてくるのは忙しいの一言である。「日曜・祭日もなしに、年がら年中、一日十六時間、年間5000時間も働きづめに働いて、元利償還もおぼつかないってんだから情けない。人間が牛を飼っているのか、牛に人間が飼われているのか、頭をかしげたくなるね。⁶⁾」

この二例から考えると、とても農村観光にも、農家、農園観光に手を、時間を割く余裕、余力はなさそうである。

EC 加盟で酪農条件は厳しくなり、柑橘類、野

業、オリーブの市場占有率は変わらないとしても、農業経営では EC 市場での競争は激化してきている。農村からの離脱は、スペインの高い20%前後という失業率にも拘らず、進んでいるようである。次に示すのは、1991年8月2—4日の『The European』紙に掲載された農村レポートであるが、ここでは景観を売物にして農村を豊かにしようという段階ではもはやなくて、農村からの人の流出が環境破壊をつくりだしているところまで来ているという警鐘の乱打がきこえて来る。

幽霊村の拡大がスペインの諸地域をさまよっている、と見出しをつけて、アリカンテの通信員ロイ・ウィックマンは、「スペインの地中海沿岸の混雑したビーチやディスコからほんの数kmのところにある、かつては盛んだった多くの村々が放棄され、廃墟となっている⁷⁾」と書き始める。

EC からの援助で、農村からの人口流出を喰い止めるべく、84億ペセタを、適切な所得、十分なサービス、魅力的な環境を含めて、農村に居続けるようにと支出するプランが始められたが、農村を保護・維持できるどころかバレンシア、カタロニアでは続々と人々は農村をすてはじめている。農村観光で村を守ろうという動きもあるが、ところが、別のところから村が守られ、人々が住みはじめる動きが出ている。流出ではなく、流入が農村に始まっているというのである。

農村観光にとって代る名案出現かというのと、そうではなく、もっと悲喜劇的事態の出現なのである。コスタ・ブランカのリゾートからほんの少し入った村、Forna では、もう20年も前に小学校も廃止され、25人の住民が残るだけだったが、人々が新たに入ってきた。しかし、村の住居100戸のうち70戸を買いあげて住みついたのはイギリス人なのだ。彼らは家だけでなく、村の祭りまで再興させたというのだ。（しかし、これでは村の再興とは言えない。年金生活者が村をかいあげただけではないか。）

ウィックマンは、最後に村に残っている地元の高齢者に人間らしい (decent) 生活水準と、

人間らしく生活できるに十分な金を与えることが先決だとするバレンシア政府スポークスマンの声をつたえて筆を終えている。

これではとても農村観光が、海浜リゾートの観光事業に代るとは言えないであろう。忙しく働いても収入は低く、農業はもう自分だけの一代という農家、高齢者それに外国から来た年金生活者で細々と生きのびている過疎の村では、農村、農園観光を担う人間が不在である。いくら良い道路、水の供給、健康・教育サービス、文化的活動に助成金を出そうとしても、事業主体がいなければどうにもならない。農業の将来に明るい見通しがなければ、村に若者が帰ることはないであろう。EC 加盟によってスペインの農業がどうなってゆくのか、良い方向なのか、悪しき結果なのか、この判断がはっきりと、一般の農民層にとって、出来るようになるまで、その時まで、農村の再興はないだろう。

したがって、農村観光は、従来の海浜リゾート観光が環境・景観を破壊した、その路線を歩み、内陸にまで、資本によって汚されることのない農村環境にまで、手をつけるものだとする、スペインのエコロジストの批判は、杞憂であるかも知れない。

- 1) 『読んで旅する 世界の歴史と文化 スペイン』増田義郎監修 新潮社 1992年 44, 43頁
- 2) 野々山, 前掲書「大土地所有」の章参照 240~256頁
- 3) ジャン・モリス, 『スペイン』仙石紀訳 図書出版社 1992年 112f頁以下
Jan Morris, *Spain*. Penguin Books. ©1979 p. 74 f
- 4) モリス, 前掲書 113頁
- 5) *Tourism policy*……, 1992 p. 116
- 6) 重富健一, 「EC加盟とスペイン農業」『経済』1988年7月号 130頁
- 7) Roy Wickmann, 'Spread of Ghost villages haunts Spanish Regions' in *Tourism in Europe*, p. 154.

おわりに

スペインはヨーロッパ諸国のなかでの立ち遅れ、後進性を脱却しようと、1960年前後から経済開放政策を続けてきた。それから30年余を経

て、スペインはGNPで世界十位に入るだけの経済的力量をつけた。経済の自由化政策は、そのかぎりでも成功したと言えるだろう。

しかし、以上みてきたように、スペインが30余年にわたって続けてきた路線のつけも大きい。1960年代、ヨーロッパの、戦後復興が一応成った時期に、イギリス、フランス、ドイツの勤労者が得た夏季長期休暇の目的地として、スペインはマス・ツーリズムを体現する国となった。「太陽、海浜、海。Sun, Sand and Sea」の3Sを売物にしてスペインは貿易収入の1/3を、観光業及びその関連産業で得ることが出来た。資本にとって「未開の」海浜、集落だった土地が、「開発され」、「近代的宿泊施設が林立する」リゾートに変わっていった。その変貌は著しいものであった。スペインのリゾートといえば、イギリス人がすぐに思い浮かべるのは、マジョルカ島であり、新しいところではベニドルムだが、アリカント近くのベニドルムの開発ぶりは、IIの章の写真の通りであり、野々山氏の『スペイン辛口紀行』の「観光地ベニドルム」の項が詳しい。バレアレス諸島の中心地、パルマ・デ・マヨルカは、ショパンとG. サンドの曾遊の地としてよりは、今では海浜リゾートの代名詞として名高い。であればこそ、大量の観光客を、夏季期間に、狭い海浜領域に迎え入れたつければ大きい。

観光客が、自国での「つつましい日常生活」のかせをはずしてつかう大量の「湯水」、雑排水、それに塵芥の山は、30年間徐々にインフラ整備も進んで次第に問題ではなくなっていたにせよ、スペイン政府及び自治州政府の立てた「新政策」にみるように、依然として財政投融资をそそぎこまなければならない「お荷物」である。勿論、地中海型気候のせいではあるが、雨の少ない夏に、大量の水道水を消費する観光客のために、ダムを用意して、自然環境を犠牲にすることを覚悟しなくてはならなかった。バレアリス諸島それにカナリー諸島、地中海沿岸でもアフリカに近い諸島州、それにジブラルタルより西に位置するアンダルシアの海岸では「水不足」解消につとめねばならなかったし、そのために

自然公園さえも犠牲の対象にせざるをえなかった。

そして'80年代終りから'90年代はじめにかけて、「トレンド」の変化が、スペインの観光業それにスペイン経済を襲った。皮肉なことにそれは「成功」のためであった。大量の観光客を受け入れるべく進めてきた宿泊施設等の人工物、レジャー諸施設は、非自然であり、「都市」を思わせるものとなる。経済的成功は、スペインの人々の生活向上をもたらした「ヨーロッパ並の暮しと賃金」に近づけたが、これはヨーロッパの旅行者、それに観光客、バカンスの人々にとっては、「スペインの美点、売物」がまた一つ、減ったことを意味する。国内旅行の費用に近くなるとは、「バック・ツアー」を我慢する必要はなくなる。加えて30年間、年間3000万人が訪れるのであるから、「エキゾチック・スペイン」ではなくなってしまう。石油価格が下りつづけ、航空会社も「規制緩和」あるいは「民営化」で互き、「のどくびをかき切る」自滅的な価格切下げ競争にまきこまれてダンピングに近づき、いわゆる「Ferner Tourismus」=超遠距離旅行、アジア・オセアニアを目指す旅行も、「バック・ツアー」の売物になってきつつあって、近年の利用客上昇率は著しい。²⁾スペインがかって売物にしていた、「自然、3S」という環境商品は、第三世界の国々が格安に販売することになってきた。

それに伝えられるところの「治安の悪さ、麻薬乱用の横行」は、'80年代中期から続く20%を超えるスペインの失業率の高さを背景にして、長期に続くことが予測されている。これも「ヨーロッパ並みの生活」の一つの果実ではある。

しかもこのスペインの「成功」は、農村部からの安い労働力の引出しによって可能となってきたのだが、農村部の疲弊は、ゴースト・ヴィレッジ（幽霊村）の出現のレポートでみたように、厳しいものがある。イギリス人、ドイツ人が村々の空屋に住みつき、一ときの賑わいを示すとしても、よそ者の余生の宿。生産と生活の共同体としての農村はかえらない。かえって地価、住居が高騰して、都市の失業者、失業した

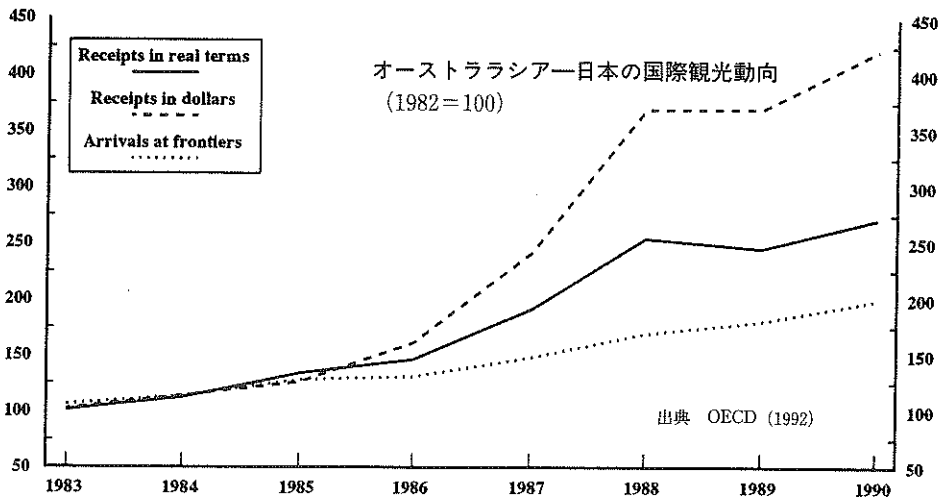
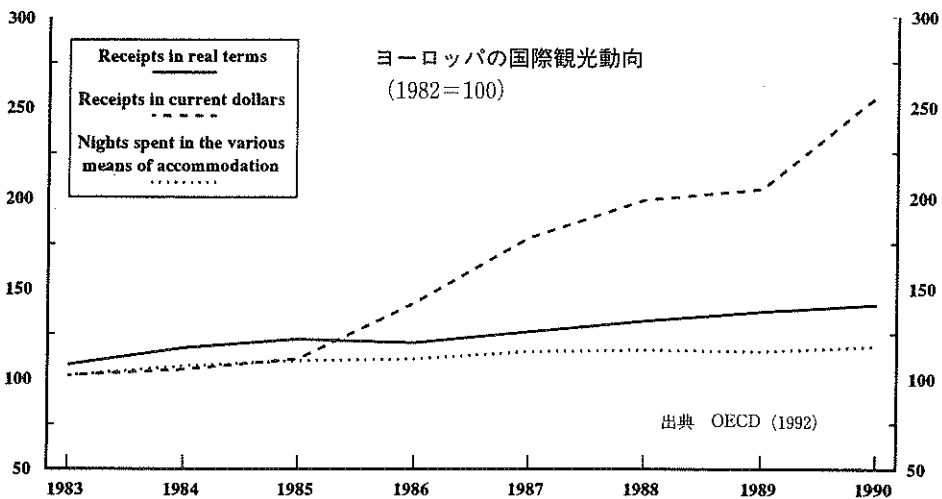
青年層が帰ろうとしても、手がとどかないこととなる。「帰りたい、帰れない」のエレジーである。

もっとも、まだ農村人口の占める割合が12%をこえているのだから、農村共同体が生命を保ちつづけている所も多いのだろう。しかし、「新政策」が期待をかけているような「農村観光, rural Tourism」の基地として、観光客を迎えられるような設備、施設、それに休暇、レジャーのための施設(ゴルフ場、馬場、トレイルetc.)の費用負担に耐えられるのかどうか問題であり、やはり夏季に集中するとすれば、農村部に「湯水のごとくつかう」観光客の水需要に応えるようなインフラが、そもそも「乾いたスペイ

ン」の内陸部に、否、海岸部にさえ、建設可能なのか、年間3000万人を数えた観光客の代替として考えた場合、はなはだ疑問と言わざるをえない。

それに最後に、粗放的な農法に立つとは言え、農業外のサービスにふりむけるほどの農村での労働力余剰、あまった人手があるのかどうかも問題である。(高齢化した農村部で、民宿が可能であろうか。)

ともあれ、新しいトレンドの出現には、「新しい政策」でのぞむしかない。スペインの農村観光が、どのような結果をうむことになるのか、注意、関心を注いでゆきたい。



- 1) デイヴィッド・ロッジ, 高儀進訳『楽園ニュース』, 42-43頁。

デイヴィッド・ロッジ, 高儀進訳『楽園ニュース』
白水社 1993年 429頁。

David Lodge, *Paradise News* 1991, London.

D. ロッジの最近著である『楽園ニュース』は、英国人とリゾート・ハワイを、登場人物と舞台とする、リゾート地の風俗・問題点を描きあげた小説である。主人公がまず登場するヒースロー空港の、カウンター周辺の会話では、スペインとリゾートは、以下の如く描写される。何故ハワイまで18時間半もかけて行くのかという皮肉めいた質問に、答えて、

「目新しさじゃないスか。つまりスネ、マジョルカですけどね、もうマジョルカなんか誰も行かないじゃないスか。えらく平凡なんスよ。地中海のブラックプール(イングランド北西部の海岸保養地)なんスね。フロリダもおんなじ、カリブ海だっておんなじ。他人の行かないところに行こうっていうなら、どんどん遠いところへ行かなくちゃね」。ロッジ, 同書 11頁。

旅行代理店で、リゾートは商品として、どう見えるかについては、以下の通り。

「店の窓と壁には派手な色のポスターが貼ってあった。きつい水着姿の日に焼けた若い男女が、浜辺で愛撫し合ったり、海の中で跳び上がったたり、けばけばしい装備のウィンドサーフィン用ボードにしがみついたりして愉樂の発作に見舞われている姿を描いたものだ。カウンターの上には、レストランのメニューよろしく行楽の旅行をいくつか書き出した黒板があった。『パルマ14日間, 240ポンド。ベニドルム7日間, 175ポンド。ゴルフ14日間, 298ポンド』バーナードは、自分の番が来るのを待っているあいだ、山と積まれたパンフレットをざっと見た。どれもこれも、びっくりするくらい変り映えがしないようだった。どのページもどのページも、入江、浜辺、カップル、ウィンドサーファー、高層ビルのホテル、プールだった。マジョルカはゴルフと同じように見え、クレタはチュニジアと同じように見えた。」D. ロッジ 同書 43-44ページ。

- 2) *Tourism Policy*……1992. p20 f.